

谷崎研究雑録

細江光

平成五年三月発行の「甲南女子大学研究紀要」に、「谷崎潤一郎全集拾遺雜纂」と題して、全集逸文・談話・作者記の類を集成しようとしたが、その後気がついたものを、以下に補遺として掲げる。

なお、翻刻の際には、誤植・仮名遣いはそのままとし、旧漢字は新漢字に改めた。ルビは、原則として省略したが、部分的に残した場合もある。

【逸文類】

最初に逸文の類を紹介する。

1、「耽美の人・潤一郎 谷崎潤一郎アルバム」

「別冊文芸春秋」昭和二十九年八月号グラビア

これは、樋口進が撮影した写真十葉に、谷崎潤一郎が説明文を付けたという体裁のもので、実際に谷崎が筆を執ったとは考えにくい。グラビアの最後に△文 谷崎潤一郎▽と明記されているので、一応、ここに挙げて置く。

以下、()内に写真の内容を細江が説明し、そこに付された谷崎潤一郎の文を、その左に掲げる。

*

*

*

写真1枚目(和服の谷崎潤一郎肖像写真)にあ、僕もぢぢいになったものだな

写真2枚目(下鴨游涙亭・表門の表札「游涙亭」)¹⁾
此の游涙亭の字は棟方志功君です

写真3枚目(下鴨游涙亭・書斎の谷崎潤一郎)に
坐つて書いてはいけなとお医者さんに云はれました

写真4枚目(熱海市伊豆山の雪後庵・書斎より庭・海を見る谷
崎潤一郎)に²⁾

此れは熱海の方の家です。一番遠くの鼻は網代です

写真5枚目(熱海市伊豆山の雪後庵の一室の谷崎潤一郎)に

安田毅彦氏筆「少将滋幹の母」の装釘画稿と手紙を屏風に仕立
て、熱海の新宅に飾りました

写真6枚目(下鴨游涙亭・書斎入口の谷崎潤一郎)に³⁾

游涙亭書斎の入口。聯は荷風先生に書いて貰ひました

小搦春風画

疎櫺夜月秋

荷風書

写真7枚目(愛猫ベルを抱く谷崎潤一郎)に

愛猫を抱いて。ベルシャ猫なのでベルと云ふ名が附いてゐます
(上)

写真8枚目(下鴨花子と遊ぶ谷崎潤一郎)に¹⁾

犬小屋にて。下鴨花子と命名してあります(左下)

写真9枚目(サングラスを掛けて、下鴨游涙亭の供侍に腰掛け
る谷崎潤一郎)に

供侍部屋にて。眼を悪くしてから夏はこんな眼鏡を懸けなけれ
ばいけないと此れも医者に云はれてゐます(左下)

写真10枚目(「細雪」装頓屏風を見る谷崎潤一郎)に

此の二枚折は菅橋彦氏筆「細雪」の装釘画稿とその時の手紙で
す。戦争直後まで作州勝山にゐた時分のことで菅氏の封筒に岡
山県真庭郡云々と書いてあります。

[注]

(1) この表札は、昭和二十一年、南禅寺に游涙亭を構えた時に、
谷崎が大きさを指定して、棟方志功に依頼したものである。こ

の時、御返しに、棟方志功の富山県福光町の住居の名「愛染韻」を扁額に書いて欲しいと頼まれて、棟方志功と、仲立ちをした十二段家主入西垣光温氏に一枚づつ書き贈った。棟方志功の「板極道」では、谷崎が「愛染苑」と命名した事になっているが、西垣氏によれば、事実ではない。「愛染苑」が「愛染韻」に化けたのは棟方志功の発音が悪かった為。潤一郎は同じ頃に、生活社から出た「痴人の愛」の装丁をも、棟方志功に依頼し、同年十二月に刊行されている。棟方志功が谷崎の本の装頓を担当した最初である。

十二段屋はスワヤンロー（後のしゃぶしゃぶ）で知られ、昭和二十一から二十三年頃、谷崎はよく座談会や客の接待に利用していた。

なお、富山県福光町の圓飛山光徳寺境内に建てられた棟方志功の歌碑「桑山も圓飛の院も秋ならむその翠山の竜胆咲けるや」の裏には、谷崎の字で、「棟方志功圓飛沫隈筆発祥之所 谷崎潤一郎」と刻まれている。

(2) 伊豆山の雪後庵には、昭和二十九年四月に移転したばかりであった。

(3) 昭和二十八年八月二十八日付け嶋中鷗三宛書簡で、永井荷風に竹聯の揮毫を依頼している。字句は「円機活法」巻之六宮室門書窓より。翌二十九年春、荷風の聯が出来上がると、それまで庭から書斎に入る小門に掛けられていた武者小路実篤の聯を表の中門に移し、小門に荷風の聯を掛けた（伊吹和子「われ

よりほかに」。

(4) 下鴨太郎・花子というつがいのスピッツがいた事が、谷崎の「高血圧症の思ひ出」に出る。

2、「祝辞」

昭和三十三年八月半ば過ぎ、福井県武生市に紫式部の歌碑を建てる事について、同市市会議員O氏が雪後庵を訪問し、谷崎潤一郎に紫式部の歌を揮毫して貰い、併せて碑の裏の銘文を谷崎から山田孝雄に頼んで欲しいと言う申し出をした（伊吹和子「われよりほかに」）。そこで谷崎は、「紫式部集」の歌を、「ここにかく日野の杉むら埋む雪小塩の松にけふやまかへる 紫式部詠 谷崎潤一郎書」と揮毫して渡し、その通りに紫式部公園内の歌碑に刻まれた。その後、谷崎は、武生市の紫式部歌碑除幕式のために、十一月三日付けでこの「祝辞」を寄せたが、除幕式には出席しなかった。

この「祝辞」は、平成元年に武生市が発行したパンフレット「紫式部公園」に、雪後庵用箋一枚に書かれた原稿の写真版という形で掲載されている。

なお、パンフレット「紫式部公園」入手に際しては、芦屋市

谷崎潤一郎記念館の御協力を得ました。ここに記して感謝の意を表します。

祝辞

* * *

今日福井県のこの地に紫式部の歌碑を建て、日本が世界に誇り得る偉大な女性の遺跡を顕彰することはまことにまことに意義深いことだと思ひます。式部は実に一千年の昔世界の他のいかなる国の人々も考へ及ばなかつた遠慮の時代にあのやうな文学を作り上げました。われ／＼日本人は自分たちの祖先にこのやうな人があることを知つてどのやうに力づけられ意を強くするかわりません。しかし残念ながら何分にも古い時代のことなので紫式部その人の個人的事蹟や行動については殆ど何も詳しいことは伝はつてゐません。たとへば式部が京都の何処で生れ何処で暮してゐる

たかと云ふやうなことは知る由もないのでありますがたゞ彼女が生涯の或る(以上一枚目)時期に父に従つて越前のこの地に来てゐたことがあることはこゝに刻まれてゐる。「日野の杉むら」の歌に徴しても明かであります。武生の地名は「武生の国府にわれはあり」と催馬楽^③などでも謡はれてをり古代からいろ／＼な産業の栄えた土地であることは一般に知られてゐますが就中武生^①の人が何よりも自慢にしてよいことと云へばこの地が間違ひのない紫式部の遺跡の一つだと云ふことであります。さればこの地は日本の名所であるのみならず世界の名所と称しても差支へないと思ふのであります。

私はこの機会に改めて式部の遺徳を偲ぶと共に永くこの地の繁栄を祈るものであります。

昭和卅三年十一月三日

谷崎潤一郎

【注】

- (1) 紫式部は、二十七、九歳頃の長徳二年から四年（西暦九六〇八年）にかけて、この地に滞在したと言われている。
- (2) △日野▽は武生の町の東南にある山。歌の後半に出て来る△小塩▽は、京都郊外右京区大原野にある山である。
- (3) 武生は元、越前の国府所在地で、「府中」と呼ばれていたが、明治二年に催馬楽「道の口」に因んで武生と改称された。
- (4) 武生は、打ち刃物・蚊帳などの伝統工業で知られている。

【談話類】

以下、談話の類を紹介する。

1、無題

「長崎新聞」大正十五年二月十七日（七）面

これは、「谷崎潤一郎氏の土産話／今の上海の文芸界／世界の近代文芸の趨勢を／日本を通じて知らうとしてゐる」と題した記事中の談話である。大谷利彦氏が、その著書『続長崎南蛮余情』で、存在を指摘された。県立長崎図書館から送って頂い

たコピーによって、記事の全文を紹介する。談話の内容は、『上海交遊記』『上海見聞録』と重なるものである。

谷崎潤一郎氏の土産話

今の上海の文芸界

世界の近代文芸の趨勢を
日本を通じて知らうとしてゐる

□……囊ふくろに長崎ながさきから渡とこ瀝した谷崎潤一郎氏は一ヶ月振りて十六日午後一時半上海より入港の長崎丸で帰りジャパンホテルに投じたが同氏は語る「今度の上海行は二度目だが少し寒かったせい最初ほど面白くはなかった、併し旧正月を上海で迎へたので年越の晩などはなか／＼面白くも思った、今度上海に行つて目に着いたのは美術

家や芸術家、文芸家などの多くは日本に留学した人々で所謂新運動を起して居る若い人々は殆ど日本の影響を受けて居ることである、文士連は同人雜誌なども勿論発行して居るが日本物の翻訳が盛んに行はれ、菊地君や武者小路君の小説などは時文に訳されて単行本として出版されて居る、だが我々の若い時代と同様支那では未だこれら若い文士連が原稿生活では食へない、私が上海に着いた時それらの人々が私を招待してくれたが広い意味の芸術家が九十名ばかり集まった、其中には脚本家もあれば活動俳優も居た、歐陽といふ若い新しい俳優はなかくの人氣だが氏は早稲田出身で脚本もかけば監督もやる、舞台にも立つといふ具合で丁度日本の上山草人のやうな

人だ。

◇

□……又郭といふ人は日本の大
学出の医学士だが、文芸の方で有名で英仏独語に通じ支那の森鷗外といはれてゐる、妻君は日本人だ
其他日本の源氏物語や万葉集などを訳してゐる謝氏や田漢など、いふ人が文壇の尤だ、驚いた事には支那の文士が日本文壇の消息に通じて居ることで、内幕なども実によく知つて居る、其人々の作品や翻訳物は持つて来たがまだ読んで居ないから其の内容の価値を批評することは出来ないが、会つて話して見たところでは相当に理解を持つて居るらしい、中には我々支那人が列強から圧迫されてゐる苦痛を文芸、美術、芸術に表現したいといふてゐる人もある、だが活

動写真等を見ると、思つたほどま
ずくはなかつたが撮影は日本より
劣つてゐる、其他はイ、ところも
悪いところも日本と同じだ、西洋
かぶれが仕過ぎてゐる、話も仕業
も余りに西洋かぶれた、そして矢
張り女優が威張つてゐる、連鎖劇
なんていふものは之から流行する
やうだ、劇界では新しい脚本はあ
るがまだ専門の俳優がそれをやつ
てくれないことも日本の或時代と
同様だ。



□……兎も角も上海の文芸界は
世界の近代文芸趨勢等も日本を通
じて知るといひ得る、上海第一日
の書房内山書店主の語るところに
よれば、売上の四分の一は支那人
で、この率が年々高まりつゝある
といふ、實際支那人は日本語で話

をするまでには多少の時日を要す
るが日本文を読む位までには半歳
位でイ、さうだから、総てのもの
を日本の書物を通じて知らうとす
るのである、だから日本の影響を
受けないわけにはいかないのであ
る」云々

2、無題

「合同新聞」昭和二十年六月五日(二)面

これは、「谷崎氏疎開／兵庫県から津山へ」と題した記事
中の談話である。仏教大学の中田葉子さんが発見、その卒業論文
で報告され、平成九年八月十四日の「産経新聞」や、地方紙各
紙で紹介された。その際、「神戸新聞」などの一部地方紙には、
私のコメントも掲載された。

谷崎と戦争との関わりについての私の考えは、先に「谷崎潤
一郎と戦争——芸術的抵抗の神話——」(「甲南女子大学研究紀
要」第31号 H8/3)で述べた通りで、今回の談話の発見は、
私の考えを裏書きするものと考へている。就中「作家としての
職域に邁進したい」という発言は、『細雪』を世界に誇れる芸

術的傑作に仕上げる事こそが、自分がお国のため出来る最良の職域奉公だと谷崎が考えていた事を裏付けるものとして、興味深い。

やや意外に感じたのは、△神風特攻隊として出て行くいまの若い人が羨しくなつた▽とまで述べている点だが、これは、この談話の直前の五月十一日に体験した阪神間の空襲が、よほど怖かったからであらう。松子夫人の「秋声の賦」(倚松庵の夢)に、空襲の際、潤一郎は△一番恐怖感が強く、最も頼りにならなかつた。▽と書かれている。谷崎恵美子の「父と私」悦ちやんぐさえ片附けば」(「新婦人」S 34/9)にも、同様の事が書かれている。

なお、「疎開日記」には、昭和二十年六月三日から五日にかけての記事もあるが、インタヴューを受けた事や、記事が「合同新聞」に掲載された事は出ていない。日記を公表するに際して、削除された可能性もあると思う。

谷崎氏疎開

兵庫県から津山へ

兵庫県魚崎町から津山市八子へ
全戸疎開した作家谷崎潤一郎氏

(六)は、三日自宅で次の如く感想を語つた

頻襲して来るB 29の醜翼を見て
あるうち、私はつくづく神風特
攻隊として出て行くいまの若い
人が羨しくなつた、こちらへ疎
開して以来心も落着いたのでし
っかり勉強したいと思つてゐる
一般では今度の戦争は口でこそ
長期戦だといひながら実際は早
く片づくと思つてゐるが、然し
私は相当長期に亘るものと考へ
るのでまづ防空壕の完全なもの
を造り、自ら土を耕して自活の
途を開き、進んで戦ひに勝つ苦
しみ、生きる艱苦を、今日千載
一遇のこの機会に”との気魄で
乗り切りたい、然してあくまで
皇国の必勝を信じ作家としての
職域に邁進したいと思つてゐる

3、作家訪問記 谷崎潤一郎氏

「教育文芸」大正十三年十一月号

茨城大学の佐々木靖章教授が発見されたものであるが、御許しを得て、ここに紹介させて頂く。また、以下に記す「教育文芸」および桜井祐男についての解説は、中野光中央大学教授の著書『教育改革者の群像』と、芦屋市美術博物館学芸員・加藤瑞穂氏の「美」を求めた教育◆芦屋児童の村小学校」（淡交社刊『阪神間モタニズム』所収）、及び、玉川大学所蔵「教育文芸」の調査に基づくものである。ここに記して、御三方および玉川大学への感謝の意を表します。

「教育文芸」は、桜井祐男が中心となって大正十三年一月に創刊。昭和二年三月に一度、休刊するが、昭和四年十一月に復刊し、昭和五年八月をもって終刊となった。

桜井祐男（一八八七—一九五二）は、石川県出身、石川師範卒。石川県内の小学校・石川師範・奈良女高師附属小学校の訓導を経て、大正十四年、兵庫県武庫郡御影町に設立され、翌年芦屋に移転し、昭和十三年まで続いた「私立児童の村小学校」で、中心メンバーとして活動した。これは、アメリカの "Progressive education"（進歩主義教育）の影響を受けた新教育

運動の一つで、学年・教科・教室・時間割・教科書等の枠を取り払い、児童たちが実地に体験しながらアイデアを出し合い、総合的かつ創造的に学んで行くような学習形態が試みられた。

しかし、桜井自身は経済的に恵まれず、貧困のため妻子を結核で失うなど、苦難の生涯であった。著書に、『生を教育に求めて』（T10）『美を恋ふものの思索』『新教育場としての芦屋児童の村』『芸術的各科教授法』（T15）『わが生活・思想・教育』（S7）などがある。

「教育文芸」は、桜井が奈良女子高等師範付属小学校の訓導を務めていた時代に創刊した同人雑誌で、教育改善のためには教師の生活を人間的に解放し、思想的にも感情的にも豊潤にゆたかに▽（桜井祐男「第一次『教文』時代の回想と第二次へ」S4／11「教育文芸」）する事が先決であるという考えから、△人間本来の性状を完全に解放し啓培するといふ芸術▽（同上）を、教師自身が創作する事を目指して始めたものである。従って、執筆者の顔触れを見ると、殆どは無名の教師である。しかし、編集委員を務めつつ寄稿していた池田小菊（奈良女高師附属小学校訓導）が作家デビューを果たしたり、木山捷平（元出石小学校訓導）が、大正十四年五月、十五年五、六、九、十一月に詩や隨筆を投稿している等の事例もある。また、その同人

は三府四十県、千五百人にのぼったと言うから、一定の成果は収めたと言えるだろう。

比較的有名な人物が寄稿した例としては、

T 13 / 4 宮本一枝

T 13 / 6 下中弥三郎・稲毛祖風・宮本一枝・村井武生

T 13 / 8 土田杏村・村井武生

T 13 / 9 室生犀星・村井武生・稲毛祖風・加藤武雄

T 13 / 10 北原白秋・宮島新三郎・村井武生・野口雨情

T 13 / 11 相馬御風・土田杏村・宮地嘉六

T 14 / 1 村井武生・下中弥三郎

T 14 / 5 村井武生

S 2 / 1 土田杏村

S 5 / 1 奥むめお

S 5 / 4 小砂丘忠義

などがある。ただし、この他に未見の号が、大正十四、五年を中心に、二十冊ほどある。

「教育文芸」は、創刊当初は大阪市の博多成象堂と提携していたが、三月に、宮本一枝の詩の掲載を巡って対立。絶縁して独立白宮の道を選んだが、以後、桜井は発行資金に苦しんだ。

また大正十三年六月号は、桜井自身の小説「培ひ」が原因で発

禁となり、その事が大々的に新聞などで取り上げられ、ために桜井は奈良女子高等師範付属小学校の訓導を辞任せざるを得なくなった。翌年、桜井は「私立児童の村小学校」に参加するが、桜井が潤一郎を訪問し、その協力を求めたのは、桜井が失職し、「教育文芸」の経営に苦勞していた時期の事であった。

ここに紹介する「作家訪問記」は、桜井の訪問インタビューで、雑誌の経営難を打開する目的から始められたのではないかと推測される。その第一回は、大正十三年九月号で、加藤武雄・島崎藤村・小川未明・室生犀星、第二回は十月号で、宮島新三郎・宮地嘉六・土田杏村・千葉亀雄、第三回の十一月号には、谷崎の他に、加藤一夫・相馬御風・百田宗治が掲載されている。十二月号は未見である。十四年以降は、「作家訪問記」は、取り止めになったようである。また、大正十四年一月号には、「作家より現代の教育及び教育者への不平、不満、希望」と題して、文学者・思想家ら五十人ほどのアンケート回答を掲載している。

谷崎への「作家訪問記」は、内容に興味深い点があるのと、この雑誌自体が極めて稀覯の書であり、湮滅する恐れもある事を考えて、煩を厭わず、全文翻刻して置く。

大正十三年十月号の「教文消息」欄に、(九月十四日(日))

桜井氏は谷崎潤一郎氏、加藤一夫氏をたづねて援助を仰ぐ。▼
とあり、訪問日が特定できる。

十一月号の奥付は、十月二十一日納本、十一月一日発行となつている。

なお、文中で桜井の寄稿依頼に対して、谷崎は談話筆記なら載せてもいいと答えているが、最も可能性の高い「教育文芸」大正十三年十二月号を始めとして、見ることの出来ない号が少なくないため、掲載されたかどうかは確認できなかった。

谷崎潤一郎氏

阪急電で岡本といふところを下りる。学校
のそばだといふ北原君の言葉に信頼して行く
桶屋で家をきく。主人は桶を叩きながら知ら
ないといふ。妻君奥にゐて教へて呉れる。私
は「妻君、主人より俐巧だ。」と心嬉しく思ふ。
二つ三つ石のきざしをあがつて平屋づく
りの着い西洋館がある。それである。刺を通
ずるといふよりもベルを鳴らす。ほし物して
ゐた下女らしい女が飛んで来る。その人に室

生氏からの紹介状と同氏からの手土産と私の
名刺をわたす。待つこと久しうして別館の応
接間に招ぜられる。そこにまた待つ五分、十
分、お忙しいのだと思ふ。

深くおち込む藤椅子に深くおち込んで、あ
たりを見まはす。午後の日が紅い色にライン
の多いカーテンをのどかに照してる。静かだ
なと思ふ。

応接間は別に装飾はない。敷かれてる緋む
しろの緞通が色鮮かに上品な野趣招をぶだけ
で、漏斗状の花瓶もそのまゝにおかれてる。
片隅にある写真帖もさうきは立たない。まあ
無飾の清き静かさといった形である。

だが、窓の景色はいゝ。郊外といった野原
が十分に味はれる。健康地だと思ふ。「この
家、谷崎さんのお好みか知ら。」などと思ふ。

やがて御主人ドアを排して「やあ」といつ
た形で入つて来る。私は立つて「初めてお目
にかゝります。私は桜井です」と自己紹介を
やる。

氏は上着なしの瀟洒たるホワイシャツの姿だが、一或は白い支那服だつたかも知れぬ――重々しく他を庄する剛腹といひたい気持を私はうける。「愛すればこそ」の作者らしいと思ふ。むごさ残忍さのうちにも、なほ味ひ生きるといふ意地の強さ悪さといひたい気持、私は尠からずその威におされて小さくなる。やつと言葉が出る。

「室生さんから先生よろしく申されました」

「あ、室生君どこだつたかね。」

「金沢の川岸といふ町です。」

「川岸・ちよつと待つて呉れ給へ。」

ノートを取りに別室に立たれる。割合にお背が小さいなと思ふ。

「川はセンといふ字かね。」

「はい。」

その瞬間、氏の左手に魚の目だまのやうな青い太輪の指輪が光つてゐることに気づく。

「室生君、ずつと金沢かね。」

「え、震災後ずつとゐられるやうです。」

「東京に出ないの知ら。」

「来年の四月ころまでゐられるといふお話です。」

「金沢へも一度行きたいと思ふんだが……」

「どうぞゐらして下さい。ちよつといふところです。」

「室生君のゐる間に行きたいと思ふんだが。」

「先生はずつとこちらにお住ひなるお心算ですか。」

「いや、東京が荒れてるもんだから、それに子どもが弱くてね。」

「少々氏と接近したやうな気持に少しは柔かになる。」

「雑誌に何か援助していただきたいのですが……」

「援助といふのは？」

「何か書いていたゞきたいのです。」

「どの雑誌にも書くといふわけには行かない君の方に書くとおれにもこれにも書かねばならんからね。僕はよく奈良に行くから、ホテ

ルに、そのとき筆記して呉れ給へ、すると出していゝから……………」

「ぢや、さういたします。そのとき御通知を願ひたいと思ひます。」

「うむ、知らさう。」

「何か教育上の御意見でもありませんか。」

「別にないね。僕ちつとも教育のことなど知らない。」

「お近くに学校もあることですから……………」

「うむ、この学校は出席歩合の名譽のためにやつてゐる。ちつとも子どものことなど考へて呉れない。」よほどお気さはりらしい口吻

「うちの子どもが弱いもんだから一週間に一日も出ないことがある。すると学校は歩合が悪くなるから一日でも出してほしいと言つて来る。子どもが弱いから休ませた方が却て教育になると思んだが……………」

「さうです。今の教育は教師のためにする教育なんです。私もさう申しあげないわけには行かなかつた。」

「このお住ひ、先生の御考案ですか。」

「いや、こんな家があつたんです。狭くて仕やうがない。」

「この頃、文壇では続きものとか物語ものとかについて何か言つてますね。」

「さうか、僕文壇のことなどちつとも知らない。」その言葉のはしに、たゞ専念にわが志道にいそしんでるだけだといふ面もちを見せられる。

「室生君、何だか月うちにこちらへ来ると言つてるね。」

「え、さう申されました。ひよつとしたら先生をお訪ねするかも知れません。」

「うむ、来るだらう。」

その時、よほどしとやかに奥さんがドアーを排して入つて来られる。私は立つて一掛する。紅茶が出る。二人はだまる。その間、私は剛腹と片意地に生れづいた氏に忠貞する奥さんの生活を描いて見る。

「奈良はまだ熱いでせうな。」

「え、そんなでもありません。」

「米月は行かう。米月だと涼しいでせうな。」

「え、それは涼しいに違ひありません。どう

ぞらして下さい。」

辞してかへる。

〔注〕

(1) 当時谷崎が住んでいたのは兵庫県武庫郡本山村北畑の洋館で、隣が本山小学校だった。谷崎はこの頃、「痴人の愛」か「神と人との間」を執筆していたと推定される。

(2) 未詳。「教育文芸」十一月号「教文消息」に、△大阪の北原氏に案内をこうて桜井氏は百田宗治氏をたづね援助を仰ぐ。▽とある北原氏と同一人物であろう。「教育文芸」大正十三年七月号に創作を寄稿している北原創之助であろうか。

(3) 桜井および「教育文芸」と室生犀星の関係は不明だが、犀星の夫人・とみ子がもともと文学好きの小学校教員だったことや、桜井も室生夫妻同様石川県出身であることから、繋がりが生じたのではないかと推量される。

この紹介状は、「教育文芸」大正十三年九月号に掲載された室生犀星への「作家訪問記」の際に、貰ったものと思われる。

谷崎と犀星とは、大正六年五月十一日に、伊香保温泉千明旅館で初めて会って以後、多少のつき合いがあり、谷崎が小田原に引っ越した直後の大正九年一月（推定）には、△佐藤も伴っ

て御遊びに入らつしやい。「人魚の嘆き」一部御送致候。「性に眼ざめる頃」一巻たしかに頂戴致候。難有御礼申上候。▽という葉書（全集未収録）を送ったりしている。

(4) 大正十三年九月一日・十二月三十日に谷崎潤一郎に会った松阪青深は、いずれの時にも谷崎が支那服を着ていた事を記録している。（慈雲尊者其他）「志賀、谷崎、佐藤先生と私」

(5) この指輪は、小林倉三郎の「お千代の兄より」によれば、横浜時代からのもので、佐藤春夫の「二情景」（T12/7）などにも出て来る。

(6) 大正十三年五月には、芥川龍之介が金沢の犀星を訪ねた後、その足で谷崎を訪ねているので、芥川の話聞いて、谷崎も金沢に行きたくなったと推定される。

昭和四年二月二十五日付けの佐藤春夫宛谷崎書簡（全集未収録）でも、△二人で金沢の室生の所へ行ってみないか▽と誘っていて、金沢訪問の意志を、後年まで持ち続けていた事が判る。

(7) この答えから、この頃谷崎が、まだ関西に定住する気持ちになつていない事が確かめられる。

(8) 草野曠三の「谷崎潤一郎氏の移転生活—文壇小景—」（文芸倶楽部）T13/12、松阪青深の前掲「慈雲尊者其他」、奈良ホテルから出した大正十四年一月二十日・二十二日付け仲木貞一宛谷崎書簡（日本近代文学館）146号（全集未収録）などからも、奈良ホテルをよく執筆に利用していた事が確かめられる。

(9) 震災後、大正十三年一月から復刊した「新小説」で、編集

顧問の菊池寛・芥川龍之介が「読物文芸」を提唱したり、「大阪朝日新聞」が大正十二年十月から前田曙山の『燃ゆる渦巻』を連載するなど、この年は大衆文芸の台頭が目立った年であった。桜井は、「教育文芸」大正十三年十月号に、千葉亀雄への「作家訪問記」を掲載しているから、「新小説」大正十三年十月号に「民衆文学の傾向を論ず」を書いた千葉亀雄から得た知識によって、この発言をしたのであろう。

(10) 室生朝子他編の「室生犀星文学年譜」に、この年、△十月中旬、京都へ行く予定であったが実現しなかったらしい。▽とある。

【作者記類】

以下、作者記の類を紹介する。

1、「秦准の夜 前書」

「中外」大正八年二月号

△十月二十日の夜のこと▽を書いたとしているのは誤りで、十一月二十日が正しい。東京駅を発ったのが十月九日で、下関・釜山・京城・平壤・奉天・天津・北京・漢口・九江・廬山を経て南京に到着していること、奉天の木下奎太郎の家に十日ばかり泊めて貰っていること(『奉天時代の奎太郎氏』)、十月十八日の「木下奎太郎日記」に、△谷崎卜城内ニユク▽とあること、十一月十一日の第一次世界大戦終結のニュースを、谷崎は廬山の牯嶺滞在中に聞いていること(『東京朝日新聞』T7/12/12談話)、などから、十月二十日にまだ南京に到着していないことは明らかである。谷崎は同様の間違いを『支那旅行』・『蘇州紀行』およびその前書・『廬山日記』でも繰り返していて、『廬山日記』では、第一日目を十一月十日として置きながら、二日目・三日目は十月十一日・十二日としている。奇妙なことではあるが、これは、中国のこの地方が余りに暖かく、△南京では蟬が啼いて居たくらる▽(『蘇州紀行』)だったことから生じた錯覚である。

△父の病氣▽は倉五郎の脳溢血で、『蘇州紀行』も、日本橋彌穀町の今商店に看病のため寝泊まりしながら、病室の二階の部屋で筆記生に口授したものであることが、『蘇州紀行 前書』に述べられている。ただし、中戸川吉二「芥川君との関係」(『文芸春秋』S2/9)・第5次「新思潮」T8/2「近況通信」・XYZ「谷崎潤一郎氏を訪ふ」(『中央文学』T8/2)・中戸川吉二「イボタの虫」などによれば、一月には本郷菊富士ホテルにも宿泊していたようであるから、彌穀町の家にいつも

居た訳ではなく、「秦淮の夜」を口述した場所がどちらであるかは特定できない。

* * * * *
左に掲ぐるは南京紀行の一節にして、十月二十日の夜のことなり。父の病氣の爲めに自ら筆を執る能はずして、已むを得ず筆記生を煩はし勿卒の際に口授したるものとす。読者此れを諒せよ。

2、「南京奇望街 前書」

「新小説」大正八年三月号

* * * * *
これは先月号の「中外」に出た「秦淮の夜」の続稿である。

あの時は締切に間に合はなかつたために妙な所で切つてしまつたので、今度は又妙な所から書き出さなければならなくなつた。話はずつとあれから続いてゐるのである。さう思つて読んで頂きたい。

3、「直木君の歴史小説について 作者記」

「文芸春秋」昭和八年十一月号

末尾の注記である。

* * * * *
(作者申す、これは相当の長さのものになるつもりで、今月はほんの緒論であるが、締切の時間が切迫したので、妙な所で切れてしまひ、申訳がない。偏に各位の御諒恕を乞ふ)

4、「飛行機雲 前書」

「花」昭和二十二年三月号

* * * * *
これは今より二年前帝都が初空襲を受けたる日の熱海西山に於ける予が日記の一日分なり、當時を偲ぶすがにもと大体原形のまゝ茲に掲ぐ

5、「幼少時代 後書」

「文芸春秋」昭和三十一年三月号

内容的には、後に単行本「幼少時代」「はしがき」に取り入れられた部分が多い。が、谷崎きく子についての記述など、珍しい部分もある。谷崎きく子(一八七八―一九五五)は久兵衛(一八五七―一九一五)・花(一八五八―一九〇一)夫妻の長女で、婿養子を買つて分家していた。

ながく「文芸春秋」に連載した「幼少時代」も、今月号を以て十二回に達したので、一と先づ筆を収めようと思ふ。私はこゝに、私が生れ出た時から小学校を卒業するに至る頃までの、自分に関係のある主な事柄は、ほゞ書き留めたつもりである。勿論種々な記憶違ひもあるであらうし、それについて親戚、旧友、未見の読者の方々から、懇切な御注意を戴いてゐる事項もあるが、それらは近々単行本として此の物語を上梓する際に、訂正を加へることにする。どうしても書いて置きたいと思つてゐたことは大抵書くことが出来たけれども、父母につれられて宮松や末広や木原店へ落語や義太夫を聴きに行つた時のこと、その頃の寄席の気分や芸人たちの面影などを、何処かで書かうと思ひながら逸してしまつたのは残念である。

なほ、私の祖父に由縁の深い深川小名木川べりの釜六のことに関して東大講師工学博士三橋鉄太郎氏から、南茅場町時代のことに関して今市川に住んでをられる勝見豊次氏から、その他昔の東京を知つてゐる友人や愛読者の方々から、たび／＼興味あるお手紙を戴いたことは感謝に堪へない。

終りに臨み、此の話の中のところ／＼で私が「おきいちゃん」と呼んでゐる谷崎きく子氏、——彼女は私の母の母の大的仲好しで、母のことを一番よく知つてゐた人であつたが、そして、私

のたゞ一人の生き残りの従姉として、今度の稿を起すに方つて少からぬ助言を与へてくれた人であつたが、不幸にも此の完成を待たずに、昭和卅年三月廿二日脳溢血で逝去した。享年七十八歳であつた。謹んで彼女の冥福を祈る次第である。

6、「三つの場合」断書

「中央公論」昭和三十五年九月号

「岡さんの場合」と「明さんの場合」を十一月号に発表する予定にしたのは、十一月号が、「中央公論」の創刊七十五周年記念特大号だつたせいもあるう。しかし、実際には「岡さんの場合」のみの掲載となり、「明さんの場合」は三十六年二月号に掲載された。

* * *

〔阿部さんの場合〕はこれを以て終る。第二第三の場合は十一月号に発表の予定)

7、「三つの場合」断書

「中央公論」昭和三十五年十一月号

「明さんの場合」が、当初予定されていた十二月号に間に合わなくなつた事情は、伊吹和子氏の「われよりほかに」に詳し

い。

それによると、「明さんの場合」は、第一稿の口述が九月二十日に開始されたが、十月十七日、谷崎が激しい心筋梗塞の発作に襲われ、月末まで静養した後、東大病院に入院。十二月七日に、五十日ぶりに病院で口述を再開し、十二日に退院、十九日に完成。一月十日発売の「中央公論」二月号に掲載された。

* * *

(次は「細雪」の後日譚とも云ふべき「明さんの場合」であるが、二の枚数が予定より超過した、め三は十二月号に譲る)

【削除部分】

以下は、比較的大きな削除部分である。

1. 『玄奘三蔵』冒頭・削除部分

「中央公論」大正六年四月号

これは、『玄奘三蔵』冒頭の前置きの部分である。最初に単行本に収録された『異端者の悲み』(T6/9刊)の時には削除されなかったが、『近代情痴集』(T8/9刊)への収録に際して削除され、今日に至っている。削除された理由は、後に

続く話の内容から考えて、前置きとしては大袈裟過ぎ、かつ長過ぎる為であろう。

既に宮内淳子氏の指摘(『谷崎潤一郎―異郷往還―』)があるので、先に「谷崎潤一郎全集拾遺雜纂」をまとめた時には、『玄奘三蔵 附記』だけを紹介しておいたが、今回、前置きの方も一応紹介して置くことにした。

なお、この前置きの末尾で語り手は、自らを「詩人」と称しているが、これは、谷崎の詩への関心が、この頃、特に高まっていた事と関係があるろう。この点については、拙稿「谷崎潤一郎と詩歌——そして音楽・声」(日9/4至文堂刊)「詩う作家たち」所収)を参照されたい。

* * *

諸君は恐らく、支那小説の西遊記で名高い、玄奘三蔵といふ僧侶の事蹟を、多少は知って居るだらう。彼が西暦の紀元六百二年に、今の河南省洛陽県に生れて、二十八の歳に印度への旅行を思ひ立ち、十七年間もかゝつて、西域の三十四箇国、天竺の七十余国を経めぐつた後、唐の太宗の貞観十九年三月に、再び長安の都へ帰つて来たことは、中学校の歴史の本にも大概載せてあるだらう。しかし、諸君のうちで、三蔵法師が印度遍歴中に、どんな恐ろしい人間に会つたか、どんな無気味な、どん

な不思議な出来事を経験したか、其れを知つて居る者は、多分一人もないであらう。勿論、私の謂はゆる「不思議な出来事」とは、西遊記に書いてある妖怪変化のやうな、架空虚妄の話を指して云ふのではない。或は又、法師が途中で襲はれたらうと想像される、天山山脈の吹雪だとか、猛獣だとか、大雪山の山賊だとか、結氷だとか、さう云ふ物を意味するのではない。法師はもとより、求法の為めに一命を捧げて、献身的の探險を企てた勇僧であるから、猛獣だの山賊だのを怖がつて居た筈はないのである。まして其の頃は、支那の勢力が最も四隣へ伸張した時代であつて、三蔵の通路に方つて居た西域地方は、今日の人が考へる程、交通が不便でもなく、人情が險悪でもなかつた。成る程、凌山の頂を超えた時や、ヒンヅグーシユの溪谷を渡つた時は、異常な寒氣と峻峭な道路とに惱まされたに違ひないが、大体から云ふと、彼は西域の國々で思ひの外の優遇を受け、いろ／＼の便宜を与へられて居る。現に高昌國の國王は、三蔵を一箇月ばかり引き留めて仁王經の講説を聴き、別れるに臨んで、法服、面衣、手袋、靴等を贈り、二十年間印度に滞在する旅費として、黄金二百兩、銀錢三萬兩、綾絹五百疋、馬三十四、人夫二十五人を支給し、其の上行く先々の國王に宛てた紹介状を、二十四通まで附けてやつた。それから素戔水城の突厥の部將は、

支那語や西域の土語を繰る通弁の青年を、三蔵に隨伴させて、印度の國境の迦畢試國まで送り届けた。だから、彼が運よく天竺の領域へ踏み込む事が出来たのは、主として此れ等の蠻夷の酋長の、お蔭であつたと云はねばならない。

然るに、昔から三蔵法師の事蹟を伝へた書籍の多くは、彼が遭遇した道中の異変や艱難を説いて居るにも拘らず、目的地たる印度の内地へ這入つてからの、私の謂はゆる「不思議な出来事」に就いて、語つて居る者は極めて少ない。もと／＼、法師の帰依する仏教の傳播は、西域の方が盛んであつて、肝腎な天竺の本土には、寧ろ外道の宗門が蔓つて居たのだから、彼が十七年の巡錫の間に、身の毛の竦つやうな恐ろしさを感じ、涙の溢れるやうな悲しみを覚えた事があるとすれば、其れは必ず涼しいカシユミルの盆地を過ぎて、中央印度の熱帯地方へ足を入れたかけた、最初の二三年の時代であつたらう。彼は其の頃になつて、始めてほんたうの印度といふものを了解し出したのである。印度と云ふ不思議な國の真相が、漸く其の時分の彼の心に、甦ろげながら分つて来たのである。彼が其の時代に目撃した印度の奇蹟、印度の神秘は、科学が発達した二十世紀の今日でもガンヂス、河の流域へ行けば、未だに屢々逢着し得る現象であつて、万里の異境に正法の源を究めに来た法師の眼には、其れ

等がいかに浅ましく、物凄く映じたであらうか、容易に推測する事が出来る。私は先に、西遊記を架空の妄談であると云つたが、若しあの中に記されて居る破天荒な妖怪談が、法師の實際に受け取つた印象の内容を、誇大に、且諷刺的に説明したものであるとしたら、私は決してあの小説に異存はない。法師が歴訪した五天竺の国々の、怪しい世界を取り巻いて居る邪宗の神々や、大自然の威嚇や、其処に棲息する民人の、さまざまの悪夢や迷信や恐怖の数々は、思ふに西遊記の妖怪よりも、もつと忌まはしい、もつと呪はしい、さうしてもつと美しい幻を、法師の面前に浮かび出させた事であらう。

私がこゝで、諸君に伝へようとする三蔵法師の逸話は、西遊記の著者がAllegoryの形式を以て暗示した意味の一端を、當時の事実就いて、Realisticに書き改めたに過ぎないのである。さうして此の逸話は、玄奘自身の著書である「西域記」にも、慧立の編纂した「慈恩伝」にも、其の他の記録にも載つて居ないから、多分私が、それを世間へ紹介する最初の人となるであらう。どうして私がそんな逸話を知つて居るかと言へば、前にも述べたやうに、玄奘を脅かした印度の秘密は、今も猶、千年の昔に変わらず現存して、「想像」の翼を生やし「憧憬」の瞳を備へた詩人の「心」に、その時代の光景を、こつそりと、

而もありありと物語つて居るからである。――

2、「梅雨の書斎から」初出冒頭および末尾・削除部分

「中外」大正七年七月号

これは、「梅雨の書斎から」の冒頭および末尾の一段落である。最初に単行本に収録された『自画像』(T 8 / 12刊)では削除されなかったが、『芸術一家言』(T 13 / 10刊)収録に際して削除され、今日に至っている。

冒頭の佐藤春夫に関する部分は、最初是小田原事件の爲、後には春夫が既に新人ではなく一家を成すに至っていた為、今更忠告めいた文章を再掲載する事は礼を失すると考え、削除したのであらう。しかし、この文章は、佐藤春夫の文学の本質をよく捉えた、興味深いものであると思う。

また、この文中に、△印度文学に現はれたる空想が無制限に放埒なるが如く▽という一節があることは、大正六年四月の『玄奘三蔵』『詩人のわかれ』以来、『ハッサン・カンの妖術』『ラホールより』『金と銀』と、インド関連の作品を立て続けに書いている事と思ひ合わせて、大いに興味を惹かれる所である。瀧田梧陰の「谷崎氏に関する『雑談二三』」(『新潮』T 6 / 3)にも、既に谷崎が、「ラーマーヤナ」や「マハーバーラタ」を

読んでいる事が報告されている。

この頃、潤一郎に会った小島政二郎によれば、潤一郎はヨーロッパへなんか行きたくない、一番行きたいのはインドだが、その手始めに支那へ行きたいと言って、その旅費を作るために春陽堂から「潤一郎傑作全集」を出したのだと言う（小島政二郎『聖体拝受』十三）。

次に末尾の部分であるが、これは悪口である為に、礼儀を考へ、また後難を恐れて、削除したのであろう。「中央公論」大正七年九月号の『浅草公園』は、この削除部分の論旨を敷衍したもので、この部分に言及して、△「中外」七月号にもちよいと書いたが▽と述べている。

なお、△僕は浅草公園あるが為に 東京を離れることが出来ないで居る。▽と書いているのは、谷崎がこの頃、既に東京を嫌って居たからであり、その理由は、「鮫人」や「東京をおもふ」に詳しい。谷崎がこの年一月から鶴沼に長期滞在したり、京都への移住を考えたり、中国に旅行に行ったりしているのも、一つにはこの為で、大正八年の暮には遂に東京を捨て、以後、再び東京に住むことはなかったのである。

（初出冒頭）

* * *

○ 此のごろ、新人佐藤春夫君を推賞する声を方々で聞く。生田長江氏、馬場孤蝶氏など恃さうである。長く文壇から認められなかつた同君の為に祝すべきである。

僕も、長江氏や孤蝶氏の驥尾に附して同君を推賞するのに躊躇する者ではない。同君が得易からざる天分を持つて居る事は、誰よりも熱心に之を認めて居る。だが佐藤君と僕とは余り懇意な仲なので、今更改まつて推賞なんかするのは滑稽だと云ふやうな気がする。それよりも寧ろ、同君の欠点を数へて見たいやうに思ふ。

佐藤君が立派な天分を所有するにも拘はらず、文壇から認められなかつたのには相当の理由がある。それは必ずしも文壇の罪ではなくて、佐藤君自身に、やはり其れだけの短所があるのでなければならぬ。いや、佐藤君自身でも其の短所に気が附いて居る筈である。

佐藤君が、「僕にかう云ふ小説の腹案があるのだが、今度此れを書いて見ようと思ふ。」と云つて、或る物語の梗概を話して聞かせる時は、僕はいつでも感心させられる。どうかすると、其れは梗概どころでなく、極めて精細な描写に亘つて、殆んど活字になつたものを読み上げるが如く、縷々として説き聴かさ

れる事さへある。さう云ふ場合の佐藤君の風貌や弁舌には、いかにも非凡な才能が生きて居る。彼の暗い陰鬱な瞳や、鷹の嘴のやうに飛び出てる口元を、ぢつと凝視して居ると、無限に豊かな、美しい空想の泉が其処から滾々と湧き出て来て、端睨すべからざる深さと鋭さとを覚えさせられる。

佐藤君の身边には常に芸術の香気が漂ひ、空想の国土が展げて居る。たしかに此の人は芸術の国から来た人だと云ふやうな心地がする。僕は佐藤君に会つて居る時ほど、強い芸術的衝動を感ずることはない。佐藤君に会つて居る時は、何となく此の世の外の高い所へ引き上げられて居るやうな気持ちになる。僕は佐藤君が何気なく云ひ捨てた片言隻句の中に、往々にして或る長い小説の筋を暗示させられる。さうして、此れだけの素質を備へた人が、なぜ世間から持て囃されないだらうかと思ふ。

ところが、佐藤君はいつでも書く書くと云つて居て、容易に書かうとしない。有り余るほどの空想を持つて居るから、それを話して聞かせるばかりで、めつたに筆にした事がない。佐藤君は自ら云ふ、自分は口で話す方が、頭の中の空想をハッキリと他人に伝える事が出来る。それを筆で書かうとすると、空想がぼやけて来て、どうも頭の中に見えて居るやうな生き生きとした物が文章に現はれて来ない。一つには又、空想が際限もな

く次ぎから次ぎへと湧いて来るために、それを適度に制限して一貫した物語を書き上げるのに恐ろしく骨が折れる。自分は常に、何処まで書いたらいいか分らなくなつて迷つてしまふと。佐藤君の書いた物がその談話に比べて幾分の生彩を欠いて居るのは、恐らく其為めなのであらう。まことに彼は空想の感濁者である。彼は放蕩児が酒色に感濁するが如く、常に芸術的空想に感濁して居る。印度文学に現はれたる空想が無制限に放埒するが如く、彼の空想も亦放埒である。彼は筆を執つて力作するだけの根気がないのは、恰も放蕩児が労働を嫌ふのと同じやうなものである。

佐藤君があまり創作を書かないのは、或る方面へ過度に精力を浪費する為めだらうと云ふ人もある。此の説も或る程度までは中つて居るらしいが、僕は寧ろ、佐藤君の天性の然らしむる所で、必ずしも精力濫費の結果ではなさうと思ふ。要するに彼は非常に傑出した、不具の芸術家なのである。彼ほど生れながらの芸術家はなく、彼ほど不精な芸術家はない。同時に又、彼ほど不運な芸術家も珍しい。

斯く云へばとて、僕は決して、佐藤君の書いたものが詰まらないと云ふのではない。たゞ少くとも、彼の口に依つて語られた芸術を聞いた事のある人には、彼の筆に依つて書かれた芸術

が、多少見劣りがするやうに感ぜられると云ふ迄である。佐藤君の芸術的素質に対して、これだけの理解と同情とを持ちつゝ、彼の創作を読んだならば、一層面白からうと云ふのである。

僕は、佐藤君の芸術の爲めに、寧ろ彼を唾にしてしまひたいと思ふ。彼が、そのおしやべりをさへ止めてしまへば、口に依つて語る事をさへ禁じてしまへば、彼は必ず、その談話にも劣らない程の創作を書き得るであらうと思ふ。佐藤君は書く前に人にしやべつて歩く。同じ材料を、いろいろな場合にいろいろな人に話して聞かせる。それ故にざ書かうとして筆を執る時分には、その表現がもう大半は死んで居るのである。云ふ迄もなく、空想その物は芸術ではない。空想を表現しようとして努力するところに芸術がある。だから、一旦舌なり筆なりに依つて表現してしまつたものは、もう其の時限り芸術としての魅力を失ふ恐れがある。芸術家のうちで少くとも小説家と詩人だけは、能ふ限り、その空想を筆にする迄他人にしやべらないやうにする方が安全である。「今度はどういふ物をお書きですか」。など云つて人に尋ねられる場合が屢々あるが、出来得べくんば標題も教へない方がいゝ。

(初出末尾)

* * *

○ 現代の日本の社会に、僕が最も反感を持つて居る階級が三つある。曰く、第一に政治家、第二に新派俳優、第三に芸者。此の三者は虚偽と卑屈と鉄面皮と貪欲との塊まりである。

政治家は存在の必要があるけれど、新派の芝居だの芸者なんぞは全然存在の必要がない。彼等が亡んで、新しい生き生きとした民衆芸術と、楽しい心地よい女友達の階級の生れんことを、僕は切に祈つて居る。目下のところ、われわれの娯楽機関は浅草公園の喜歌劇と活動写真より外には何も無い。僕は浅草公園があるが爲めに、東京を離れることが出来ないで居る。

かく云へばとて、僕は必ずしも芸者に持てない爲めの腹癒せではない。いや、最近に大いに持てた事は、友人の某々氏等が証明してくれるだらうと思つて居る。誤解を防ぐために、一言付け加へて置く。

3、「早春雜感」末尾・削除部分
「雄弁」大正八年四月春季増刊号

これは、「早春雜感」末尾の一段落である。最初に単行本に

収録された『白画像』(T 8 / 12刊)では削除されなかったが、『芸術一家言』(T 13 / 10刊)収録の際に削除され、今日に至っている。

芥川に対する個人攻撃になることと、文意の歯切れが悪くなることを考慮して削除したものであろう。

* * *

ついでに云つて置くが、芥川君は始めからロマンティックルルはあるまい。アナトール、フランスや芥川君のやうな作家を、浪漫主義芸術家の仲間に入れるのは批評家の誤りだと思ふ。そんなら私は何であるか、——自分の事は云ひたくないからまあ止めにして置かう。

4、『芸術一家言』末尾・削除部分

「改造」大正九年十月号

これは、『芸術一家言』末尾の一行である。最初に単行本に収録された『芸術一家言』(T 13 / 10刊)で削除され、今日に至っている。

『芸術一家言』は、「改造」の大正九年四月、五月、七月、十月の各号に連載されたものである。この削除部分から、十一

月以降も書き続けるつもりだった事が判るが、それが何故取り止めになったのか、詳しい事情は分かっていない。

例えば、『芸術一家言』連載に先立って、「改造」大正九年三月月号に掲載された「四月一週年紀念号芸術預告」では、「文芸評論」として、片上伸「文壇色々の事」と武者小路実篤「感想」と共に谷崎潤一郎の名前が挙げられているが、題名の記載はなく、(筆者自ら文壇に向つて責任ある評論と謂ひ四月より三ヶ月継続掲載)と注記されていた。また、谷崎自身、『芸術一家言』の冒頭で、▲いつ迄つゞけるか(中略)は目下のところ未定である。(中略)云ひたい事がなくなればいつでも止めようと思つて居る。▼と述べていた。だから、いつ止めても良かった訳だが、中絶の原因は、恐らく執筆の時間が取れなくなつた為であらう。

谷崎はこの年一月から、「中央公論」に大作「鮫人」の連載を始める一方、五月からは、大正活映株式会社の脚本部顧問にも就任し、多忙を極めていた。その為、「鮫人」は、最初の内こそ一月四十四ページ、二月休載、三月三十三ページ、四月四十四ページと順調だったが、五月十二ページ、六月・七月・夏季特別号連続休載、八月十四ページ、九月十九ページ、十月十四ページと難渋し、読者からも苦情が寄せられる

ようになったため、「中央公論」の大正九年十一月号には、「鮫人」の続稿に就いて」を掲載して読者に謝罪すると共に、
▲本年十月以降の分を一と纏めにして、正月号へ載せる▽と約束していた。しかし、十月二十一日に佐藤春夫が小田原の谷崎宅にやって来て、いわゆる小田原事件のごたごたが始まり、シナリオ「月の囁き」の執筆や、映画「葛飾砂子」の撮影など、映画の仕事もあり、「鮫人」の続稿は正月号に間に合わず、大正十年三月号「中央公論」の『不幸な母の話 断書』では、まだ諦めずに、そのうちに「鮫人」の続稿を書くと言っていたが、結局、そのまま中絶してしまつた。大正九年十二月号「改造」の新年号予告に、「題未定」として出ていた作品も、結局間に合わなかつた。「芸術一家言」も、こうした中で、立ち消えになつてしまつたと考えられる。

なお、「芸術一家言」で谷崎が次に取り上げるつもりで居た泉鏡花の「風流線」は、かつて谷崎が、「活動写真の現在と将来」(『新小説』T6/9)の中で、▲きつと面白い▽映画になると言っていたものであるだけに、映画と文学に関する谷崎の「一家言」を展開するつもりであつたと推定され、中絶が惜しまれる。

* * *

「明暗」の批評は先づ此の位にして置いて、私は次ぎに、泉鏡花氏の「風流線」を挙げて見よう。(つゞく)

5、「岡本にて」末尾・削除部分

「夕刊大阪新聞」昭和四年六月三十日

これは、「岡本にて」末尾の一段である。最初に単行本に収録された改造社版「谷崎潤一郎全集」第十二巻(S6/10刊)で削除され、今日に至っている。蛇足と見たのであろう。

なお、「岡本にて」の現行本文で▲友人某氏▽および▲某氏▽となつてゐる所は、初出、改造社版「谷崎潤一郎全集」第十二巻、「谷崎潤一郎隨筆選集」第二巻(S26/7刊)では、それぞれ▲江戸堀の美術商森川喜助君▽および▲森川君▽であつた。▲友人某氏▽および▲某氏▽に変更されたのは、中央公論社版「谷崎潤一郎全集」第三十巻(S34/7刊)からである。

谷崎と森川喜助との交友については、芦屋市谷崎潤一郎記念館第十二回特別展図録「志賀直哉と谷崎潤一郎」(平成五年七月三十日刊)で紹介しておいたので、参照されたい。

* * *

隨筆と云ふものも、かう書いて行くと際限がなく、締めく、

りが附かない。大凡そ予定の枚数に達したので、先づ此の辺で筆を収めることにする。

6、「文房具漫談」末尾・削除部分

「文芸春秋」昭和八年十月号

初めて単行本に収録された時（『拱陽隨筆』S10/5刊）以来、末尾の一文が削除されている。附記的なものだったからであらう。《菅君》は菅忠雄で、当時の「文芸春秋」編集長。

潤一郎は九月九日から十六日まで上京し、本所区小梅町三ノ三の笹沼別邸に滞在していた（松子『湘竹居追想』）ので、恐らく別荘の一室で、菅忠雄の居催促を受けながら書いたものであらう。

なお、「続文房具漫談」は、結局書かれなかった。

* * *

まだもう少し書きたいことがあるけれども、締切が迫つて、菅君が隣室で待つてをられるから、今日のところはこのくらゐにしておき、いづれ改めて「続文房具漫談」を書かして貰ふことにしよう。

この他に、「武州公秘話」冒頭に削除部分があるが、余りに

長大なので、再録はしない。

【谷崎書簡】

以下、谷崎の全集未収録書簡を紹介する。

①昭和八年一月（年月推定）二十六日付け 佐藤續宛書簡

これは、有馬温泉御所の坊主人・金井啓修氏が古書店から購入された書簡であるが、特別にお許しを得て、ここに紹介するものである。

この書簡は、切手がはがれ、消印が不明のため、先ず年代を推定しなければならない。

手がかりとなるのは、倚松庵用箋を用いていることと、谷崎の住所と、隨筆の原稿を送っている事である。谷崎が倚松庵用箋を用いたのは、昭和七年二月からであり、これ以降で谷崎が北畑に住んだのは、昭和七年十二月〜九年三月である。

この期間に、「改造」に掲載された谷崎の隨筆は、『芸』について（S8/3〜4、のち『芸談』）だけで、『存琴抄後語』（S9/6）も北畑在住中に原稿を送った可能性がない訳ではないが、四月号の創作について相談している手紙である事を考

え併せると、随筆は『雲雀』について』で、手紙の年代は昭和八年と考えるべきであろう。

また、この手紙の中では、四月号創作について相談しているが、四月号の原稿は三月上旬が締切の筈である。もしこの手紙が二月二十六日のものだとすると、選筆の谷崎が新たに短編を構想して書き上げるには、時間が少し足りない感じがする。とすれば、昭和八年一月二十六日が有力となろう。

次に『お樹』についてであるが、昭和三十三年九月四日付けの妹尾健太郎宛谷崎書簡によって、これが妹尾君子の想い出話をもとに構想された小説である事が判っている。

今日知られている限りで最も早く『お樹』に言及した谷崎の手紙は、昭和七年四月二十九日付けの新潮社方中根駒十郎宛書簡で、『お樹』を執筆中であること、百枚を越えそうであることを報じている。『お樹』は、新潮社の大衆雑誌「日の出」創刊号(S7/8)に掲載予定だったが、『お樹』では高級すぎるということで、取り止めになった。

今回紹介する書簡は、その後、谷崎が『お樹』を「改造」に廻そうと考えた事を示す興味深いものである。

封筒「表」

東京市芝区新橋七丁目
十二番地

別配達

改造社方

佐藤績棟

原稿在中

切手 はがれ

消印 ? ? ? ? 26 ? ? ? ? 12

封筒「裏」

ノ 廿(七*抹消)六日

兵庫県武庫郡本

山村北畑

谷崎潤一郎

消印 ? ? ? ? ? ? 8 | 12

〔用紙・用筆など〕毛筆・倚松庵用箋1枚

〔本文〕

御手紙拝見、又一昨日高平君

来訪四月号創作のこと、御相

談を受けました、「お梅」は四月に間に合ひさうもないのですが他に短篇の材料がありまして、それから書くことにいたし升、しかし堅い御約束は一寸いたしかねます、

随筆統稿十八枚御送りいたします、十八枚は半バですが月末金子是非三百円程³

必要なのですが、スグ続きを書き差引いて頂きますからそれだけ貸て貰へますまいか、でなければ十八枚分だけにても御電送下さい、なるべくは三つ都合して頂き度存ます、廿六日 潤一郎 佐藤續様

侍史

〔注〕

(1) 改造社社員。昭和十九年、改造社の新事業開拓のため、南方に派遣される途中、船が撃沈され死亡した事が、「木佐木日記」に出ている。

(2) 昭和六年九月二十二日付け雨宮庸蔵宛谷崎書簡(芦屋市谷崎潤一郎記念館資料集(二) 雨宮庸蔵宛谷崎潤一郎書簡)所収)によれば、「改造」が谷崎に払っていた原稿料は四百字あたり十二、三円くらいと言う。とすれば、三百円は約二十五枚分に相当する。谷崎はあと七枚ほど、追加で送るつもりだったのであろう。

②昭和十七年(年代推定)十二月十一日付け矢沢高佳宛書簡

これは、矢沢高太郎編『辛夷の花―矢沢高佳の遺稿と思い出』(S48/3刊)に収録されているものである。

矢沢高太郎氏(現・読売新聞文化部記者)から頂いたコピーにより、封筒と本文を確認する事が出来た。ここに記して感謝の意を表します。

矢沢高佳氏は、昭和六年に読売新聞社に入社。社会部次長兼文化課長、論説委員などを歴任して、昭和二十年八月に退社した。

この手紙は、切手がはがれ、消印が不明のため、年代は推定するほかない。が、谷崎の住所が反高林となっている事から、

昭和十一年十一月から十八年秋までの間である事が判る。また、文中に△中央公論の長篇小説統稿を執筆中▽とあるが、反高林時代に谷崎が書いた長編小説は、「細雪」しかないので、昭和十七年と推定できる。

谷崎は昭和十七年四月に熱海市西山五九八番地に別荘を購入。文中に△長らく旅行中のため▽とあるのは、この熱海の別荘で『細雪』を執筆していた事を言うのであろう。

封筒〔表〕

東京市京橋区銀座西三丁目

一番地読売新聞社編輯局

矢沢高佳様

切手 欠

消印 不明

封筒〔裏〕

十一日

兵庫県武庫郡住吉村

反高林

谷崎潤一郎（印）

〔用紙・用筆など〕毛筆・巻紙

〔本文〕

拝復

長らく旅行中の

ため十一月廿四日附御

状昨日拝見、御返

事延引の段不悪

御海容被下度候

さて折角の御申越

に候へ共本月は引

つゞき中央公論の長

篇小説統稿を執

筆中にて余事を順

る暇無之候まゝ

御希望に添ひ難

く此段幾重にも

御諒察被下度候

先は乍延引御

返事まで如斯御座候

早々

十二月十一日

谷崎潤一郎

矢沢高佳様

侍史

丸ビル五階

中央公論社

雨宮庸蔵様

十一日

切手 一錢五厘

消印 愛媛・菊間 9・8・11 后014

【参考書簡】

以下は、元「中央公論」編集長・雨宮庸蔵氏所蔵の書簡の内、谷崎と関連するもので、特別にお許しを得て、ここに紹介するものである。

①昭和九年八月十一日付け雨宮庸蔵宛嶋中雄作絵葉書

【裏】国立公園・屋島

【表上段】

東京市

丸の内

【表下段】【本文】

小森田君をとられて嘸御不満の事と思ふ、君の不平面が目に見るやうな気がしてお気の毒、だが許してね、

文章読本キット

ウレル

三方は出すつもりで広告ゼヒタノム、谷崎へはデンウツテオイタ

㊦

【解説】

中央公論社では、「婦人公論」の発行部数を伸ばすために、昭和六年一月から「婦人公論愛読者訪問旅行」を始めていたが、昭和九年八月には、「婦人公論新生活運動」のタイトルのもとに、全国巡回の講演会を開催した。第一班（近畿・中国・九州・四国地方）講師は、細田民樹・清沢淵・倉田百三・嶋中雄作であった。これは、その旅先からの絵葉書である。小森田一記は、昭和九年八月から中央公論社出版部に所属していた社員。雨宮庸蔵氏の昭和十一年三月三十一日の日記に、『文章読本』は、▲正味六万部すでに売りつくされている▽▲宣伝費印税生産費を差し引いても五万円は利益をあげてをる▽とある。

②昭和十一年四月四日付け雨宮庸蔵宛山田孝雄葉書

〔表〕

東京市麹町区

丸の内ビルヂング五八八区

中央公論社

雨宮庸蔵様

仙台市元常盤町三番地

山田孝雄（印）

葉書 一銭五厘

消印 仙台 11 4・4 前8—12〒

〔本文〕

拝啓愈御清適奉賀候御返之

源氏残念四綴別封小包にて差上候御受

取被下度候小生異存は前申上

候通の次第御取捨御随意になし

被下度くれくも願上候事に

御座候 頓首

〔解説〕

谷崎の「源氏物語」現代語訳について、校閲を担当していた山田孝雄が、「若紫」の巻の藤壺の密通・懷妊事件を巡って、谷崎の訳文に反対したのであろう。

この直後の四月九日付け雨宮庸蔵宛谷崎葉書（芦屋市谷崎潤一郎記念館資料集（二）雨宮庸蔵宛谷崎潤一郎書簡所収）に、▲山田博士の御意見は十中の八九迄尊重してその通りにいたします、大変参考になり私自身も学問になり喜んで居りますから今後御遠慮なく御加筆を乞ふ旨御伝へ下さい▽とあるの

は、山田博士の意見に従い、密通に関する部分は全文削除するという意味である。

③昭和十一年八月六日付け兩宮庸蔵宛五十嵐力書簡

封筒〔表〕

雑町区丸の内ビルヂング五八八、中央公論社

兩宮庸蔵様

御親展

切手 三銭一枚

消印 豊島 11・8・6 ? 8-12

総務部受付印 11・8・7

封筒〔裏〕

絨 豊島区果鴨

七ノ一六一六

五十嵐力

〔本文〕

急啓 昨日はがきを上げて後尚よく御手紙を

拝見いたしますと唯だ明石の巻の「前王の御手」の一句について細流の本文が御入用なだけの御用のやうでもありそれならば別にわざわざの御米駕や御使を煩すにも及ばぬ事と存じ左に其条の本文全部を写して御目に懸けることにいたしました

○せん大王○一本前王とあり花鳥此れに

よれり青表紙は大王とあり大王とは親

王をいへり然れば延喜帝の誰人ぞ親

王に伝へ給へるを其御手より此入道の

伝たるなるべし大王と伝る本可_レ然也

これ丈であります 文字送り仮名など

すべてそのまゝに書きました

右当用のみ 御自愛を祈上げます

敬具

八月六日午後

兩宮君

御もと

五十嵐力

〔解説〕

『源氏物語』現代語訳に関する問い合わせに対する回答である。詳しい事情は判らないが、雨宮庸蔵氏が早稲田大学の卒業生であった関係で、早稲田大学の五十嵐力教授に問い合せたのであろう。

問い合わせの箇所は、「明石」の巻で、明石の入道が琴について、△自分は延喜の帝から弾き伝えて三代目。娘は私を真似ている内に、自然と「前大王の御手」に似た。それを是非聞いて欲しい▽と光源氏に持ち掛ける所。△細流▽が『細流抄』である事は、言うまでもない。

④昭和十一年八月十二日付け雨宮庸蔵宛山田孝雄葉書

〔表〕

東京市麹町区

丸の内ビルヂング五階

中央公論社

雨宮庸蔵様

仙台市元常盤町三番地

山田孝雄（印）

葉書 一銭五厘

消印 仙台 11 8・12 前8―12
総務部受付印 11・8・13

〔裏〕〔本文〕

拝啓源氏統稿御送被下正に拝

受仕候過日米青森之堂寺に

旅行致し昨夕やうく帰宅仕候次第

貴稿も明日より拝見すみ次第御

送り申上度谷崎様へも何卒宜しく

御伝被下度願上候 頓首

〔解説〕

やはり、谷崎の『源氏物語』現代語訳についてのものである。

⑤昭和十一年八月二十二日付け雨宮庸蔵宛長野草風葉書（速達）

〔表〕

麹町区丸の内

丸ビル五階中央公論社内

雨宮庸蔵様

荒川区渡辺町一〇四〇

長野草風

八月二十二日

葉書 一銭五厘

切手 八銭一枚

消印 渡辺町 11・8・22 前8-12

消印 東京中央 11・8・22 前8-12

総務部受付 11・8・22

〔裏〕〔本文〕

拝啓昨日谷崎氏御同道にて御
光来被下候処先約時間の為外
出失礼申上候足疾にて四十日
余外科療法病院通ひ源氏
下絵延引申訳無之目下院
展製作中ならば相済ませ
執筆可仕候家族沓掛へ参り居り
用事にて今日同地へ参り明後日帰京可仕候

〔解説〕

長野草風は日本画家（一八八五—一九四九）で、谷崎とは明治四十年代からの友人である。谷崎の現代語訳「源氏物語」の本文には、長野草風がデザインした各帖毎に異なる絵模様が、薄いオレンジ色で刷り込まれた。▲源氏下絵▽はその為のもの。この日の事を書いた兩宮庸蔵氏の日記があるので、以下に一部、紹介して置く。

八月廿一日

谷崎潤一郎氏来訪さる。源氏物語口語訳の装幀のことなどで、一緒に長野草風氏を訪ねる車の中で「長野はツボラだからねえ」とか「正宗（白鳥）の遊んだつていふのはあれや澤売買だよ、汚ないよ、僕はその点は潔癖だがね」とか相変らず憎めない口の悪さ。潔癖で思ひ出すのであるが、（中略）一昨年であつたか兵庫県打出の同氏宅を訪れ阪神国道をドライブした車の中で、手頭に出来た腫物をてつきり梅毒からきた動脈硬化と思ひこみとう／＼悪さをした祟りがきたかと如何に煩悶したかを話してゐたが、是など相手を選ぶに当つては貴族主義的に潔癖ではあつても結局それだけの事であるを語つてをる。「少年」で思ひ出したが彼の『少年』は面白い作品で作者の面目を躍如たらしめてをるが些さか浮薄である、（中略）が、此の日記などで論

ずる余裕はないからやめておかう。それよりは今日、「所得税金を年千二百円もとられるので随分馬鹿々々しい」とか「今とまつてをる宿やはとても安く朝飯がついて二円なんだよ」とか子供のやうにふくれてみたり、はしやいだりした谷崎氏、それから夫人の土産にとテリヤの売値十八円のを十五円にまげさせて関西まで送らせた谷崎氏、消息をかきつけてをいた方が相応しいやうだ

⑥昭和四十年九月二十七日付け雨宮庸蔵宛谷崎松子書簡

封筒〔表〕

大田区調布鷯木町二一五

雨宮庸蔵様

切手 十円一枚

消印 京橋 40・10・19 ? 016

封筒〔裏〕

紙

神奈川県湯河原町吉浜字遠ヶ平一八九五の一〇四

谷崎松子

〔本文〕

肅啓

去る九月廿五日京都

鹿ヶ谷法然院の墓所に

安楽寿院功誉文林徳潤居士の

埋骨を滞りなく相済

ませました 就きましたは

供養のお印までに

心ばかりの品を拝呈

聊か謝意を表したく

存じます

略儀ながら書中を

以て謹んで御挨拶

申し上げます

草々

昭和四十年九月廿七日

谷崎松子

【揮毫類】

以下、揮毫の類を紹介する。

1、歌一首（写真1参照）

昭和十年五月二十一日に中央公論社から刊行した『拱陽隨筆』を、南宮庸蔵氏に贈るに際して、表紙に墨で揮毫した歌である。
△潤一郎／藻塩草／かきとゝめけり／住の江の／きしに／よる
く／夢を／つゝりて▽
と読める。

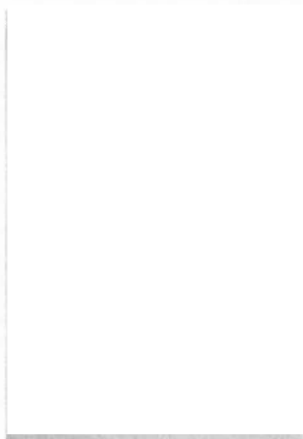


写真1

2、大野麦風『大日本魚類画集』題字（写真2・写真3参照）

日本画家・大野麦風（二八八八～一九七六）の『大日本魚類画集』は、品川清臣（一九〇七～？）が昭和四年に創業した西宮書院の最初の木版画出版として刊行されたものである。

『大日本魚類画集』は、第一輯から六輯まで、十二枚づつ、計七十二枚が発行されている。第三輯は五百部、第五、六輯は三百部限定（他の輯については未見）であった。第一輯ノ一「鯛」の解説パンフレットによれば、監修和田三造・題字谷崎潤一郎・賛文薄田泣菫・著者大野麦風・解説田中茂穂・上田尚・英文グレン・ショウとなっている。

第一輯ノ一「鯛」解説パンフレットの奥付は、昭和十二年八月一日印刷、十日発行となっており、第六輯ノ九「ヒラメ」の奥付は昭和十九年三月一日摺上、五日発行となっている。また、昭和十三年五月には、完成した第一輯十二枚を皇室に献上している（品川清臣「和田三造画伯と版画『昭和職業づくし』の思い出」鼎談「餐」所収）。

写真2は、第一輯ノ一「鯛」解説パンフレットの表紙に印刷されていた題字であるが、第一輯全十二枚の絵一つ一つを収めたたさの題簽にも、同じ題簽が木版刷りで貼付されていたと推定される（実物未見）。

写真3は、昭和十五年二月二十五日摺上三月一日発行の第三輯ノ七「オコゼ」の題簽である。これは、谷崎の字を木版にしたもので、背景の色を様々に変えながら、昭和十九年の第六輯まで使われ続けたようである。



写真2

写真3

谷崎が題字の揮毫を引き受けた経緯を、品川清臣の『都わ

すれの記』不忘抄』（鼎談『餐』所収）によって記すと、西宮にあった「京楽」という飲み屋が谷崎の行きつけの店で、週に一、二回は顔を出していた。そこに、大野麦風もよく来合わせため、二人に親交が生じ、やがて、品川清臣とも知り合い、揮毫を依頼することになったと言う。

品川清臣によれば、最初の揮毫は、まだ千代子と離婚する以前の岡本梅の谷時代であったと言うが、これは疑問の残る所である。なお、品川清臣は戦後、京都に移り、西宮書院を「京都版画院」と改称し、谷崎潤一郎の『都忘れの記』の版元となっている。

三者の出会場の場となった「京楽」については諸説あるが、浅見淵『続・昭和文壇側面史』と宮崎修二郎『環状彷徨』を中心に、他の資料も加えて述べると、谷崎家で客を饗応する時に板前をしていた男が、昭和三年頃、西宮の阪神沿線の西国街道沿いの与古道町に出したおでんで酒を飲ませる飲み屋で、谷崎は「東西南北客争来」「春夏秋冬客不絶」と自分の字を彫った竹の聯を贈った。向島百花園に掛かっている聯の文句を書いたものと言う。店ではそれをマッチにしていた。店の中はスタンダード風で、谷崎が自ら担いで来て寄贈したと伝えられる真っ白な楕圓一枚板に向かって、丸椅子が何脚か並べられていた。谷崎

は「日本盛」を愛好したので、蔵元が特に蔵出しの甘口で蜜の様にこったりとした酒を提供していた。

昭和三年十一月の「中央公論」に、永見徳太郎が谷崎らの協力を受けて書いた「関西美食録」の中に、西宮の△廓町横のおでん屋京楽で、あげ袋なんかを頬張りながら、(日本盛の)盃を傾げる気分も又特別であった。▽と紹介して以来、京楽のがんもどきは、「中央公論」と呼ばれるようになった。谷崎は自ら詩を書いて盃を焼かせたりもした。丁未子や松子と一緒の事もよくあった。

昭和五年四月二十日午前十時頃、「京楽」の主人森田虎一(42)が弟・捨三に暴行を受け、死亡するという事件があり、二十二日の「大阪朝日新聞」で報道されている。しかし、「京楽」はこの後も店を続けていたようである。

昭和八年の「文展」に出品された中村不折の李白を描いた油絵が日本酒造のポスターになった時、谷崎がそのポスターに「李白一斗詩百篇」と揮毫した。そして、その後、間もなく、「京楽」は閉店したと言う。

なお、「大日本魚類画集」については、芦屋市文化振興財団副理事長・富本憲吉記念館館長である辻本勇氏の所蔵本によつた。ここに記して感謝の意を表します。

3、「神光会展覧会」題字(写真4参照)



写真4

昭和十六年七月三十日、神戸画廊発行の図録『神光会展覧会』所収。大塚銀次郎の「画廊生活満十年」(前掲『神光会展覧会』所収)によれば、△紀元二千六百年の佳辰を迎ふるに際して、偶々神戸画廊も開設満十周年に相当するので、茲に些か奉祝と記念と感謝の敬意を表する為め、昨秋以来今度は日本画並に洋画の現代一流の大家に嘱して新作の揮毫を請ひ、当地在住の谷崎潤一郎氏に書いて頂いた「神光会展覧会」の名の下に、第一回を昭和十五年十一月十二日より六日間、第二回を翌年三月十二日より七日間、神戸画廊に開催した。之れが其展覧会の記念画集である。▽

「神光会」は極めて稀艷の書と思われるので、ここにその内容を紹介しておく、最初が谷崎潤一郎筆「神光会展覧会」題字、次いで春山武松の序文、神光会第一回展覧会・第二回展覧会目録、出品者全員の白筆署名と出品作品の写真、大塚銀次郎の「画廊生活満十年」・「神戸画廊の歴史」奥付である。

出品者は第一回展が、青山義雄・鏑木清方・川端龍子・小杉放庵・小林古径・坂本繁二郎・須田国太郎・曾宮一念・中川一政・林重義・牧野虎雄・安井曾太郎、第二回展が、梅原龍三郎・川合玉堂・川西英・菊池契月・小磯良平・竹内栖鳳・橋本関雪・福田平八郎・藤島武二・藤田嗣治・前田青邨・安田毅彦である。顔触れの豪華さには、驚きを感じ得ない。なお、日中戦争下にも拘わらず、戦時色を感じさせるものは藤田嗣治の「召集令」ぐらいで、後は安田毅彦の「益良男」に、僅かに感じ取れる程度である。

「神戸画廊」は、元「大阪毎日新聞」記者・大塚銀次郎が、昭和五年七月から昭和十八年にかけて、神戸市元町駅下鯉川筋に開いていた画廊である。当初は単に「画廊」と言った。大塚銀次郎の「画廊生活満十年」によれば、元々「画廊」はギャラリーの語呂合わせで、大塚銀次郎の店の名として、「大阪朝日新聞」神戸支局長・朝倉芥郎が命名した固有名詞であったが、

後に「画廊」が次第に普通名詞化して行った為、「神戸画廊」と称するようになった。『細雪』上巻（十六）に、▲鯉川筋の画廊で妙子が人形の個展を開く事が出て来るが、これも「神戸画廊」の意味である。

谷崎潤一郎と大塚銀次郎との間に、何時どのようなにして交友関係が生じたのかは、今の所、明らかではない。「神戸画廊の歴史」によれば、昭和五年七月に、小出楢重の弟子だった仲田菊代作フランス人形展が開催されているので、小出楢重が仲介した可能性はある。もしそうなら、この人形展は、『細雪』の妙子の人形展のモデルになった可能性もある。また、昭和五年十月には池長孟著「開国秘譚」出版記念展、五年十一月には大野表風日本画展（以後も数回展覧会を開いている）、昭和六年三月には吉井勇色紙短冊展が開かれているので、この三者のうちいずれかが仲介した可能性もある。

もう一つの可能性は、元「大阪朝日新聞」記者・岡成志（のち「神戸又新日報」などに入社）で、彼が大塚銀次郎と親しかった事は、大塚銀次郎が編集発行していた「画廊」の機関紙「ユーモラス・コーベ」第2号（S7/2/1）（一）面「ワイ・びつくりした」欄に、▲岡咄眼先生が谷潤夫人に誘惑されてダンスをしたさうな▼と出たり、同紙第3号（S7/3/3）（二）

面「YOKATTA NE!」欄に、△又新の岡主平休職となると直ぐ横浜に行つて得意の選挙応援演説と出たりしている事からも分かる。恐らく昭和七年までには、或る程度の面識は生じていたのではないかというのが、私の印象である。

上記以外で、神戸画廊で開かれた展覧会の内、谷崎と多少とも関係のありそうなものを、「神戸画廊の歴史」によって挙げておくと、先ず昭和六年四月に伊藤慶之助滞欧作品展がある(以後も数回展覧会を開いている)。伊藤慶之助(一八九七—一九八四)には、後に松子の連れ子である恵美子が、小学校時代に絵を習う事になる。

六年七月には宮下貞之助滞欧作品展がある。宮下貞之助の夫人アリスは、松子の妹・重子がフランス語を習っていた先生で、「細雪」上巻(十)のマダム塚本のモデルである。

昭和七年五月には、ペインテックス工芸展(「ユーモラス・コーベ」第6号(四)面「画廊日誌」欄による)があり、「細雪」上巻(十九)に出て来るペインテックスとの関連が考えられる。七年十二月には、岡田七蔵洋画展が開かれている。岡田七蔵と谷崎とは、少年時代からの懇意であり(谷崎記念館所蔵・昭和四年(年代推定)六月三十日付け森川喜助宛書簡)、「婦女界」大正十五年二月号の『二と房の髪』の挿絵や、同月改造社から

刊行された「鮫人」の挿絵を担当している。

昭和九年二月には、高橋稚子フランス人形展があり、やはり「細雪」の妙子の人形展との関連が考えられる。

昭和十一年七月には樋口富麻呂・松平春樹二人展、昭和十五年三月には、岸田劉生・小出楳重遺作洋画展、同年四月には同日本画展がある。

この様に、神戸画廊と谷崎の交友圏には、重なり合う部分があり、谷崎が積極的に関与して、知人の展覧会を開かせたケースも、あったかも知れない。また、神戸画廊での展覧会が切っ掛けとなって、新たに知人を得たケースもあったと考えられる。

なお、上記以外で、谷崎と大塚との交友を裏付けるものとしては、昭和十四年三月に、△画廊大塚氏令嬢山吹八重子嬢のために▽と詞書きのある歌「ゆく春を庭の離にせきとめて七重に八重に咲ける山吹」があり、「谷崎潤一郎家集」に収録されている。

また、昭和十五年三月三十日、池長美術館開館披露宴の記念写真に、池長孟・林重義・小磯良平・川西英・竹中郁と谷崎・大塚銀次郎が一緒に写っている(池長家所蔵アルバムの人名注記による)。

そして、同年十一月二十八日付け安田朝彦宛書簡に、△神戸

画廊の主人大塚銀次郎氏なる人小生の友人に候処今回右画廊第何周年とかの記念展覧開催に付出品を依頼したい旨、口添えをし、その甲斐あってか、安田靫彦は「益良男」と題する絵を出品している。

大塚銀次郎については、なお不明の点が多く、今後とも研究を続けて行きたいと思っている。

なお、「ユーモラス・コーベ」については、兵庫県立近代美術館学芸員・山崎均氏の御協力で閲覧させて頂いたことをここに記し、感謝の意を表します。

4、石井漢記念碑「山を登る」題字（写真5参照）

写真 5

浅草観音堂横・西参道商店街入り口の石井漢記念碑「山を登る」の題字。設計は谷口吉郎、彫刻は船越保武。昭和三十八年四月八日に除幕式が行われた。稲沢秀夫氏の『聞責谷崎潤一郎』などで既に存在が指摘されていたものである。

この機会に、今日知られている限りの谷崎と石井漢の交友をまとめておくと、先ず、谷崎潤一郎が石井漢の舞踊を初めて見たのは、石井敏『舞踊詩人石井漢』によれば、大正五年六月に帝国劇場で行われた『新劇場』の第一回公演の時である。「新劇場」は小山内薫・山田耕柞・石井漢らの劇団である。

しかし、石井漢と谷崎潤一郎が本当に親しくなったのは、漢が浅草オペラに加入した大正六年秋以降のようである。石井漢の『私の舞踊生活』によれば、谷崎潤一郎・佐藤春夫・今東光・東郷青児・辻潤・武林無想庵らは、浅草へ行く度に、田原町のおでん屋の二階に住む漢夫妻を訪ね、一緒に酒を飲んだと言つ。谷崎はまた、『東京をおもふ』で告白しているように、石井漢夫人八重子の妹で、漢の踊りのパートナーになった小浪（一九〇三）が好きで、大正七年の中国旅行の際には、立派な栗鼠の毛皮のコートを、お土産としてプレゼントしたりした。谷崎はせい子や小浪のような十五、六歳ぐらゐの少女の中性的な肉体を好んでいた。『西湖の月』に出る△女優のK子▽も恐らく

小浪の事であろう。なお、谷崎が小浪への愛情を、せい子との関係のカモフラージュに使っていた事は、佐藤春夫が『この三つのもの』で暴露している。

その後、谷崎は石井漠のために尽力する所があり、大正十二年三月には、ヨーロッパに公演旅行に出た石井漠のために、後援会の発起人に名を連ねたと言う(山野辺貴美子『をどるばか人間石井漠』)。

また、大正十三年春には、留守宅を守っていた石井漠夫人八重子が、関東大震災で焼け出されて困っていたので、谷崎が仲介して、東京から六甲に移転したばかりの東亜キネマに女優として入社させた。そして、谷崎は撮影現場へ見物に来ては、撮影が終わると岡田時彦や八重子を連れて神戸の三宮へ行き、中華料理などを御馳走しながら、八重子の演技について助言したと言う(石井欽『舞踊詩人石井漠』)。

大正十四年、帰国した石井漠と小浪が、十一月二十日から二十六日に掛けて、道頓堀の大阪松竹座で、舞踊公演を行った時(『松竹七十年史』)、谷崎が二十三日の「大阪朝日新聞」に『西洋と日本の舞踊』を寄稿して絶賛した事は、有名な事実である。

こうした過去の経緯があって、谷崎は、石井漠記念碑「山を登る」の題字揮毫を引き受けたのである。

5、天城診療所所蔵資料

以下に紹介するのは、肝臓病専門医として有名だった天城診療所の故・佐藤清一氏が収集された資料である。

佐藤清一氏(号・十雨 一八九六〜一九九二)は、明治二十九年、宮城県に生まれ、東北帝大医学科を卒業後、東京帝大眞鍋物療内科での実習を経て、昭和三年、現在の伊東市中央町十三の三十一に天城温泉療養所を開業。昭和十二年、肝臓肥大の患者が急増している事に気づき、流行性肝炎と命名した。が、当時の医学界はこれを認めず、佐藤氏を嘲笑・迫害した。しかし、佐藤氏は、以来、肝臓の臨床研究に没頭し、肝臓病の名医として名声を馳せるに至った。綽名となった「肝臓先生」も、最初は何でも肝臓病にしてしまうという悪い意味だったのが、後には尊敬を込めた愛称となったのである。

佐藤氏はまた、なかなかの趣味人でもあって、炙焼を作り、俳句をよくし、戦争中伊東に疎開して、十年間住んだ俳優の上山草人・作家の尾崎士郎、また戦後睡眠薬中毒の治療を兼ねて転地療養に来た坂口安吾らとも親交があった。尾崎士郎の「ポーデン侍従」、坂口安吾の「肝臓先生」は、佐藤氏をモデルとしたものである。そうした交友の記念の品々や、佐藤氏が買い集

められた芭蕉・許六・其角・一茶・嵐雪・蓼太らの書画・俳書など、約一千点の品々は、診療所の二階に設けられた肝臓先生記念館で、現在、一般に公開・展示されている。

佐藤氏はまた、随筆もよくし、その随筆集『肝臓先生』が春歩堂から刊行された際（S28/4/30）には、上山草人が序文を書き、扉に草人の句「獺の鼻うごめかず梅が香ぞ」と献辞「佐藤十雨／上山草人／謹呈／谷崎潤一郎先生」を記した一本が谷崎潤一郎に献呈されており、現在、芦屋市谷崎潤一郎記念館に保存されている。

今回、ここに紹介するのは、天城診療所の資料の内、谷崎の親友だった上山草人と関連するものである。

上山草人と天城診療所との関係は、昭和十九年、草人が伊東市に疎開した時に始まり、十年後の昭和二十九年七月、草人が死の二ヶ月前に伊東市を去るまで、交友が続いた。

上山草人と谷崎潤一郎との交友関係を、ごく簡単にまとめておくと、二人の初対面は、明治四十五年三月十日、雑司ヶ谷で開かれた森の会である（『文章世界』M45/4に秋田雨雀による当日の記録がある）が、二人が本当に親しくなるのは、大正五年からのようである。上山草人とその妻・山川浦路が、近代劇協会によって、新劇運動の一翼を担っていた時期である。大

正八年三月からは、草人・浦路の渡米により、昭和四年十二月まで、空白の期間があるが、ハリウッドの映画スターとなった草人の帰国後、すぐに両者の交友は復活する。昭和十一年六月頃（推定）、草人の二度目の妻と谷崎との関係を草人が疑い出し、両者は一旦絶交状態になるが、昭和二十五年初夏に和解し、草人が亡くなった二十九年七月以降も、遺族との関係は谷崎が亡くなるまで続いていたと言う。

天城診療所の所蔵する資料で、直接谷崎に関わるものは二つある。一つは、上山草人と谷崎潤一郎の寄せ書きの掛け軸（写真6参照）である。「天下横行的 草人」の字と蟹の絵を草人、「会費金貳円也 潤一郎」を谷崎が書いたと推定される。残念ながら、揮毫の時期や経緯は定かでない。が、恐らく蟹を一緒に食べた時の戯れ書きであろう。

写真6

谷崎は、昭和七年から十一年にかけて、上京の際に鶴見の草

人宅を宿代わりに使っていた。草人の「谷崎潤一郎との四十年」(S26/4「文芸春秋」春の増刊第2人物説本)によれば、潤一郎は宿代の代わりと称して、戯れ歌を短冊に書き、また、草人が絵を書いてよく合作もした。その結果、潤一郎の墨跡が一杯溜まったが、戦争と鼠にやられて、あらたか損じてしまったと言う。恐らく、この掛け軸も、昭和七、十一年の或る年の冬に、蟹料理を食べた際のもので、たまたま無事に残ったものであろう。

蟹と言えは、昭和八年十二月四日の「都新聞」に、「文壇哀愁二重奏」(後半は徳田秋声と小林政子のこと)という記事があり、それによれば、十二月一日の夜、谷崎は草人と丁未子と三人で、大森のカニ料理屋・沢田屋の離れ座敷で最後の別れの小宴を張り、丁未子はその夜、療養を名目に、温泉地に向けて一人旅立って行ったと書かれている。寄せ書きの掛け軸は、まさかこの時ではないと思うが、或いは沢田屋で書かれたものかも知れない。

天城診療所のもう一つの谷崎関連資料は、上山草人の著書『蛇酒』に寄せた谷崎潤一郎の序文『蛇酒に序す』の草稿(松屋製二百字詰め十四枚・ペン書き 写真7参照)と、それを上山草人が筆写したものである。この二つを比較してみると、谷

崎の草稿は直しが多く、草人がそれを清書して、印刷に廻したようである。

写真7

谷崎のこの草稿と、全集所収の本文との間には、微妙な相違があるが、草人の清書稿は、極めて正確に谷崎の草稿に従っている。この異動は校正の際に谷崎が手を入れた結果と推定される。ただし、「衣川孔雀」が伏せ字になっているのだけは、もともとの谷崎の意志ではなく、草人が清書に際して直したものである事が、草稿と清書稿の比較から判明した。

なお、谷崎の草稿で見せ消ちになっている部分では、孔雀と別れた草人を慰めるために、▲深更に自働車を走らせて、東京市中を遊び廻ったやうに覚えて居る▽の後に、△君は兎心して坊主になるとか云つて、▽云々という部分のあった事が、注意を惹く。

次に、谷崎とは直接関係ないが、天城診療所が所蔵する上山草人資料の一端を御紹介しておく、短冊では、「まちの子かはらうく」とよひかわすわが終林の春の夜の月 北米終林にて草人、モスタワのソヴェエト映画創始十五周年記念映画祭に日本映画界代表として出席した際の「こくひんが乞食してゆくさむさかな 昭和十年早春それん行 草人」などがあり、絵では昭和六年の「怪髯奇魚を釣るの図 辛未春」などがある（写真8参照）。

写真 8

また、"Y. Nagase 1928, No. 2" と書かれた上山草人の

肖像画（写真9参照）があるが、これは永瀬義郎の木版画「トルコ帽をかぶれる男」で、昭和四年四〜五月の春陽会展に出品されたものである。写真では木炭画のように見えるが、永瀬照子夫人によれば、この頃の永瀬の作品には、版画で刷った後、手彩で輪郭をぼかし、柔らかな感じに仕上げたものがあるということで、これもその一例と見られる。

写真 9

永瀬義郎の著書『放浪貴族』などによれば、アメリカで草人の世話になった随筆家・内田誠の依頼で、釣り好きの草人が獲った魚を両手にぶら下げている木版の肖像「ある日の草人」を作り、「トルコ帽をかぶれる男」と共に昭和四年四〜五月の春陽会展に出品し、春陽会賞を受賞した。その後、「ある日の草人」

は、長らく行方不明になっていたが、平成五年、版画家・長谷川潔旧蔵の一枚がフランスで発見され、四月六日付けの「朝日新聞」などで大きく報道された。また、永瀬には、他に「支那人に扮せる草人」という木版画もあり、昭和四年（一九二九）二月の日本創作版画協会展に出品している。

「トルコ帽をかぶる男」は、恐らく内田誠の依頼によって、「ある日の草人」「支那人に扮せる草人」と同じ時に作られたものと思われる。

なお、この項目に関しては、天城診療所・永瀬照子夫人・上山草人令嬢高橋梅代氏に御世話になりました。ここに記して感謝の意を表します。

6、和可奈寿司所蔵短冊（写真10参照）

「和可奈」は熱海に今もある寿司屋で、先代の御主人の時から谷崎が蝋燭にしていた。ここに掲げた短冊は若菜主／人を励ます 火にやかれ水にひたりて七転／八おきしてこそ男也けれ

写真10

潤一郎は、その店内に飾ってある資料の一つである。これは恐らく、昭和二十五年四月十三日夜から払曉にかけて、熱海で大火災が発生した際、被災した「和可奈」の主人を励ますために、書き贈ったものであろう。

この他にも、店内には、色紙「庭さきの石のはさまに蜥蜴の尾見えかくれて山樞の咲く 潤一郎」（『谷崎潤一郎家集』によれば、昭和十三年作の歌）や「比翼鳥 潤一郎書」が飾られている。

また、昭和三十四年六月四日、東京産経ホールで、武智鉄二演出の皇太子御成婚奉祝地唄舞「春の曲」に、谷崎潤一郎の娘・恵美子が皇太子妃役で出演した際の写真や、昭和三十五年五月十五日、熱海の富士屋ホテルで行われた観世栄夫と恵美子の結婚披露宴の写真。また、時期は不明だが、熱海駅で「和可奈」先代御主人と谷崎の写真などが飾られている。

なお、この項目に関しては、「和可奈」の現在の御主人に御世話になりました。ここに記して感謝の意を表します。

【写真資料】（写真11・写真12参照）

この写真は、故・大島堅造氏の所蔵されていたもので、この

度、御子息の大島秀夫氏から、芦屋市谷崎潤一郎記念館に寄贈されたものである。大島秀夫氏よりお許しを得て、ここに紹介しておく。

写真11



写真12

度裏側に当たる所に、大島堅造氏の手で、前列右から清水・恒川・一（大島堅造自身の意）、後列右から大野・館野・大貫・谷崎と人物名が注記されている（写真12参照）。さらに、
“Taken by the late Mr. Iida, in Sept. '04.”と、これまで判っていなかった撮影者および撮影年月も明記されていて、まことに貴重である。

一九〇四年（明治三十七年）九月と言うと、谷崎が一中五年の時である。この頃の谷崎や大島堅造の交友関係、および手持ちの「昭和十五年十一月 東京府立第一中学校如蘭会及現在生徒名簿」から、清水は時好（三十八年卒）、恒川は陽一郎（三十八年卒）、大野は誠（三十八年卒）、館野は英二郎（後に栄吉と改名）（三十七年卒）、大貫は雪之助（雅号・晶川）（三十九年卒）と推定される。

大野については、もう一人、同姓の人物が同学年に居るが、「学友会雑誌」第四十五号（M38/2発行）に、「甲五文学」として、五年甲組の大野誠・大島堅造・恒川陽一郎と一緒に寄稿している所から、大野誠と見て間違いない。

写真を撮った“the late Mr. Iida”は、一中の卒業生名簿に名前がないが、「学友会雑誌」第四十八号（明治三十九年度。発行年月日未詳）に掲載された恒川陽一郎の「故飯田直吉君の

この写真は、周囲を楕円形にトリミングした形ではよく眼に触れるが、この写真では、左下隅の急須・湯呑なども写っており、映像も鮮明で、雰囲気が非常によく分かる。

また、写っている人物についても、これまでは、谷崎・恒川・大貫以外についてはよく分からなかったが、写真の各人物の丁

手紙」、および同誌同号の雑報欄に掲載された「故飯田直吉君追悼会」の記事から、飯田直吉と推定される。

詳細は不明だが、飯田直吉は谷崎らと同学年で、一中卒業の翌明治三十九年四月二十三日に死亡し、同年九月八日に一中で行われた「故飯田直吉君追悼会」では、清水時好が追悼の辞を述べ、恒川陽一郎が懐旧談をしたほか、大貫雪之助・谷崎潤一郎らも委員として出席した事が前掲雑報欄記事によって判る。

この写真が撮影された場所や意味については、確かな手がかりはないが、写っている人物の内、館野英二郎一人だけが、明治三十七年三月に卒業して、九月から東京高等商業に入学していること、そして、写真の方でも、後列右端の人物一人だけが、制服ではなく、私服と思しき洋服を着ていること、などから推理すると、この写真は、館野が卒業後、後輩たちの所に遊びに来て、その記念に写真を撮ったものではないかと考えられる。また、前列中央に恒川陽一郎が坐っている所から、恒川家の庭で撮ったものではないかと推量される。

ただし、右端の私服の人物は、大島堅造の注記では、大野となっていて、その隣の中一の制服を着た人物が館野となっている。疑問は残るが、大島堅造が、後年、名前を注記した際に、順序を間違えたものと取り敢えずは解して置く。

なお、「学友会雑誌」閲覧に際しては、如蘭会および日比谷高校の御協力を得ました。ここに記して感謝の意を表します。

【参考記事類】

以下、谷崎に関連のある新聞記事類を紹介する。

1、昭和六年一月二十五日「因伯時報」記事

昭和六年一月二十四日の「東京・大阪朝日新聞」「東京日日新聞」「報知新聞」などに、潤一郎と丁未子の結婚が報道された余波である。「因伯時報」は、明治二十五年に鳥取市で創刊された地方紙で、昭和十四年、「鳥取新報」「山陰日々新聞」と合併し、「山陰同盟日本海新聞」(現「日本海新聞」)となった。

この記事は、冒頭に概略の説明があった後、大阪府立女専某先生のお話・白木屋某氏談と、丁未子の父・憲の談話を並べたものである。冒頭の説明は常識的なもの、大阪府立女専某先生のお話は、真面目ない子だったというだけのものなので、共に省略し、後の二つだけを翻刻して置く。ここに掲げることは出来ないが、丁未子の写真も掲載されている。

鳥取の生んだ近代女性 *

古川丁未子さんが

大谷崎の新らしい妻に

◇：朗らかな人生の春は鳥取娘から

谷崎さんの

好くタイプ

白木屋某氏談

古川嬢が大阪在住当時親交のあつた白木屋某氏は語る

あの方は大阪時代に度々遊びに
来られましたがとても非常に性格のハ
ツキリしたまた一面非常に近代
的感覚のある女性でした英語な
ども可なりうまかつたらしく容
姿も整い近代的容貌の持主でし
た谷崎さんの好まれさうな方だ
と思ひます

新らしい娘を語る

「幸福な結婚であればよいですが……」

丁未子さんの父は肯定

今や各方面に非常なセンセーシ
ンと興味を以て注目されてゐる古
川丁未子さんの実家を西町新蔵に
訪ねると嚴父の憲氏は快く記者
を招じて左の如く語つた

丁未子と谷崎氏との結婚問題が
かう具体的にきまらうとはあま
り突然のことで驚いてゐますこ
の間一二度丁未子から手紙でい
つて越して来てゐましたが父とし
ての意見は谷崎氏は堂々たる文
壇の大家で相当な年配でもあり
丁未子などはまだほんの子供で
はあまり滑越（こぼ）すぎる事だからと
いつてやりました、別段絶対反
対ではありませんがまだ丁未子

の兄妹にも相談してゐないので何とも申上げられませぬいづれ谷崎氏の方から話があると思つてゐます、たゞ前夫人の離婚事件が丁未子のためのように世間から誤解されることを心配してゐます然しよくあの問題を考察せば杞憂に過ぎないことで……

丁未子が「文芸春秋」の二月号に羊の玩具から感想を書いてゐるさうですが、丁未子といふ名は羊の年に生れたので名はつけたのですがこうした問題の起きたのも何かの因縁でしょうね

あの子の趣味ですか、別段これといふものはありませんでした小学校時代絵を描くことが好きで「少女の友」へ絵を投稿してゐましたが七回当選したので実業の日本社から銀時計を買つた

ことがあります、それから女專在学中病気で暫く帰島中に南窓館にゐられた若いグレブスさんやウイルソンと懇意にしてゐて英語を勉強してゐました、大変性質の明るい子ですから皆様から可愛がつて戴いてゐました

最近洋服ばかり着てゐるさうですが、着物を全部こちらへ送つて返して来たことがあります

あまりフラツツバな風彩は谷崎氏などの趣味と合ひますかどうかですかなア、谷崎氏とはまだお目にかゝつてゐませんが大変な厳格な人ださうですから何んでもよくお宅へ丁未子やお友達などが訪問してゐるとき夜分遅くなると思つて必ず自動車を送つてやつてゐたさうですから、かりに結婚が実現したにしてもよく谷崎

氏のよき伴侶者となるであらう
かと思つてゐます

2、昭和六年十二月十一日 大阪毎日新聞社発行「号外」

これは、岡本の川谷崎邸を買い取った文箭郡次郎氏が保存しておられたもので、御遺族の文箭孝子氏からコピーを頂戴した。谷崎が岡本の家を売った時期と、売却価格がかなり正確に判る珍しい記事なので、お許しを得て、翻刻する事にした。ここに記して文箭氏への感謝の意を表します。

この「号外」は、第二次若槻内閣の総辞職に因して発行されたものなのであるが、裏面に埋め草的に幾つかの記事が掲載されていて、その中に、「売られた谷崎氏の邸宅」という写真入りで、この記事が掲載されている。

なお、昭和六年十二月十二日の「東京日日新聞」(九)面学芸欄に、「ニュースの頁／岡本の邸を売って／谷崎氏の借金払ひ」として【大阪発】のほぼ同文の記事が掲載されている。ただし、谷崎邸の写真の代わりに谷崎本人の写真が使われ、「買主の話」はない。家の売却価格は△三万余円▽とされている。また、税の滞納額は△三千三百円▽、記事の末尾は△これだけで

つと一息つけたといふものである▽となっている。この二点については、「号外」の方は誤植と思われる。

昭和十一年二月号「中央公論」所載の座談会「新春懇談会」(谷崎潤一郎・永井荷風・市川左團次・嶋中雄作・中央公論記者)で、谷崎は「岡本の家は、買った人が建て増して変にしてみました。名前を付けてくれと言われているが、厭になつてまだ行かない。」という趣旨の発言をしている。この点について、文箭孝子氏に向つた所では、文箭郡次郎氏は、結局、この家を「梅谿庵」と命名し、お寺の住職に書いて貰った額も残っていると云う。ただし、命名者が谷崎潤一郎であつたかどうかは定かでないとの事である。

* * *

売られた谷崎氏邸

二万六千円で話が纏る

滞納の税金もすつかり片づく

所得税、国、県、村税の滞納三千数
百円の谷崎潤一郎氏は今夏丁未子
夫人とともに高野山中に逃れ税務
署よりの催促の矢を避けてゐたが

最近高野山を下り密かに西宮市外
大社村森貝字蓮毛根津清太郎氏別
邸の離れ座敷を借受けて住み金策
に奔走してゐたが十日午前十時こ
ろ西宮税務署に氏の代理が出頭し
滞納額二千三百円の納入を終つた
それは大阪の関西信託会社に抵当
にはいつてゐる阪急沿線岡本の邸
宅に買手がつき二万六千円に売れ
たために関西信託の債務二万三千
円も皆済し一時は税務署から家屋
の差押へが云々され債務に弱り切
つてゐた氏もこれでやつと一息つ
けたといふのである

買主の話 谷崎氏邸を買つ
たのは大阪市西成区岸松通一、
堂島米穀取引所員文節郡次郎氏
で同氏は語る「私の末子の知行
(二七)と私も老夫婦が隠居住
ひとするために買ひ入れました

金銭の授受もけふ(十日)全部
完了してをります」

3、昭和六年十二月十五日「大阪朝日新聞」(十二)面記事

これは、上山草人に関する記事であるが、谷崎とも関係があ
るので、ここに紹介する。

女六分の一孤島に

草人が猟奇別荘

情趣豊かな女護ヶ島を

東洋のモナコにする意気込み

海女と真珠と牡蠣養殖で名高い三
重県の南端志摩郡的矢湾にある孤
島渡鹿野に映画人上山草人が村か
ら敷地の無代提供を受け村民青年
団員ら総出で道路開拓、地均らし
などすべて無償でやり同島唯一の
高燥の地

大日山　の頂上に漁荘

を建て友人谷崎潤一郎氏をはじめ
文壇、画壇、劇団のあらゆる友人
をこゝに誘つて猟奇的なこの女護
ヶ島渡鹿野でなければ味ははれぬ
といふ変つた情趣をもつエロ探検
と波静かな絵画美に富んだ島の風
景を満喫させようといふ企てが実
現し、草人は十二月三日松江市を
振出しに山陰、中国方面で渡瀧兵
慰問金募集の漫談旅行をやつてゐ
たが十三日午後再び

この島　をたづねすで
に建てられた漁荘の門前に滅多に
門標など書かない谷崎氏が親友草
人のために特に執筆した竹材に
「草人漁荘」と鮮やかに書いた門
標を掲げ竹内区長その他有力者達
にとりかこまれカメラに収まつた
草人は語る

衣笠組の唐人お吉のロケーション
のため鳥羽滞在中伝説に富む
志摩めぐりをやつてゐるうちた
だ一つ現代の交通文化から遮断
された女護ヶ島に

不思議　なエロの取引
をやつてゐること、人情風俗に
おいてどこの地へ行つても見ら
れぬ純朴さを発見したのでこゝ
に愛着を覚え一泊したところこ
れを知つた村人と僕がこゝに別
荘をたてなければならぬほどの
深い交渉をもつに至つた、島の
周開一里、人口三百五十余、戸
数七十の中女六分男四分といふ
不思議な存在が

猟奇的　な僕を引きつ
けた、僕の好きな魚釣りや海水
浴、山遊びなど何でも出来るの
で僕は俳優生活を打切つたらこ

こに養魚場、競馬場、牡蛎、真珠の養殖などをやるほか娯楽機関を出来るだけつくつて東洋のモナコともいふべきパラダイスをこゝに実現させたいといふ抱負を（一字不明）つて早速建築に着手するはずだ（鳥羽電話）

以上が記事の全文で、「草人漁荘 潤一郎」と記した竹の門標と、その横に佇む上山草人の写真が掲載されている。

なお、秦豊吉の『偉人粹人』（S 31 刊）所収の「上山草人」にも、ほぼ同趣旨の話が紹介されているが、昭和五年の出来事としている事と、谷崎がこの十二月十三日に草人と一緒に渡鹿野島に来たように書いている事とは、誤りと思われる。恐らく谷崎は、草人に頼まれて作って置いた門標を、草人に渡しただけで、この日は島に來ていないと思われる。

なお、谷崎が揮毫した「草人漁荘」の門標については、平成七年五月十八日に、皇学館大学国文学会の文学散歩の事前調査で、渡鹿野島の上田元之助氏の御遺族のもとに所蔵されていることが確認されたと言う。永栗啓伸氏の御好意によってお送り

頂いた「皇学館大学国文学会会報」（H 8 / 1）の、斎藤平氏による「文学散歩報告 谷崎潤一郎の足跡」の中に、その写真が掲載されており、その説明によれば、縦八十五センチ、横九センチ、高さ四センチの孟宗竹に、文字は暗緑色、印は赤のペシキで「草人漁荘 潤一郎題（印）」と記されている。また、上田家には、「奈良坂や南大門のきさはしに／ねむりて春の日をくらすはや／潤一郎」という短冊も遺されていたと言う。

この他、前海寺に建つ渡鹿野観光開発顕彰之碑に、上山草人・谷崎潤一郎・上田元之助氏の名が刻まれている事や、渡鹿野島に「谷崎が不倫旅行に来た」という話が伝えられている事などが報告されている。

これらの点から考えると、谷崎は一度はこの地を訪れたようであるが、その時期ははっきりしない。昭和七年五月十日付けの妹尾健太郎宛書簡に、△もし出来るならば佐藤と一緒に（中略）志州の草人別荘へ廻り度と存居候▽とあるが、実行されたかどうかは確認できていない。